

国史跡指定・三好長慶生誕500周年記念事業 記念シンポジウム資料集

国史跡

# 飯盛城跡

— 歴史的価値と今後の活用を語る —

三好長慶肖像  
(聚光院蔵)

大日本六十余将  
阿波三好修理大天長慶  
(個人蔵)

主催：大東市、(一財)自治総合センター  
後援：総務省、四條畷市・四條畷市教育委員会

## 当日次第

- 受付開始 12:00
- 開会挨拶 12:45～12:50 東坂 浩一（大東市長）
- 基調報告 12:50～13:10（20分）「飯盛城跡の調査成果」 李 聖子（大東市）
- 講演 13:10～13:50（40分）「飯盛城の城郭史上における位置付け」  
中井 均氏（滋賀県立大学名誉教授）
- 休憩 13:50～14:00（10分）
- 講演 14:00～14:40（40分）「飯盛城主と下剋上」  
天野忠幸氏（天理大学准教授）
- 14:40～15:20（40分）「飯盛城の歴史的位置—「天下」の首都—」  
仁木 宏氏（大阪公立大学大学院教授）
- 休憩 15:20～15:30（10分）
- 討論 15:30～16:55（85分）  
（コーディネーター）岡田 賢氏（大阪府教育庁文化財保護課）  
（パネラー） 中井均氏、天野忠幸氏、仁木宏氏  
内田和伸氏（奈良文化財研究所 文化遺産部長）  
村上始氏（四條畷市教育委員会）、李聖子
- 閉会挨拶 16:55～17:00 北田 哲也（大東市産業・文化部長）

### 凡例

- 1) 本書は、大東市が一般財団法人自治総合センターのシンポジウム助成金を得て、令和4年10月10日（月・祝）に開催する国史跡指定・三好長慶生誕500周年記念シンポジウム『国史跡飯盛城跡—歴史的価値と今後の活用を語る—』（会場：大東市立総合文化センターサーティホール）の資料集である。
- 2) 本書に掲載する写真のうち特に記載のないものは大東市の所蔵資料である。
- 3) 資料の掲載にあたっては、四條畷市教育委員会（石垣写真）、天理大学附属天理図書館（「キサトウス 日本諸島実記 日本図」）、兵庫県立考古博物館（用語解説の模式図）から掲載の許可をいただいた。
- 4) 飯盛城跡の考古学調査については、総合調査成果をもとに李聖子（大東市）が執筆した。

## あいさつ

飯盛城跡は大阪府の北東部、大東市と四條畷市にまたがる標高 314 m の飯盛山に築かれた戦国時代の山城で、城域は東西約 400 m、南北約 700 m を測り、西日本有数の規模を誇ります。山上からの眺望は素晴らしく、西は大阪平野から遠くは淡路島、北は北摂地域から京都まで見渡すことができます。ここを居城としたのが、織田信長に先駆けて京都を押さえ、畿内一円の支配に成功した三好長慶です。近年の研究では最初の天下人という歴史的評価がされており、彼が勢力を保っていた時は、ここが日本の政治の中心でした。

このように、飯盛城跡は我が国の戦国時代の歴史を理解する上で大変重要な遺跡であるため、大東市と四條畷市は、この城跡をより良好な状態で保存し未来へ残すべく、国の史跡指定を目指して考古学、城郭史、日本中世史、保存整備等の各分野の専門家のご指導を受けながら、平成 28 年度から総合調査を実施してまいりました。総合調査では、各分野において飯盛城跡の歴史的価値を明らかにすることができたと考えます。そして、令和 3 年 10 月 11 日には、歴史的価値が認められ飯盛城跡は国史跡指定となりました。この発掘調査の成果が国史跡指定につながったものと高く評価され、本年 4 月 6 日の「城の日」に、第 1 回「日本城郭協会大賞」を受賞することができました。また本年度からは、大東市・四條畷市共同で飯盛城跡の保存・活用の基本方針となる保存活用計画の策定を進めています。

本年は飯盛城主であった三好長慶の生誕 500 周年にあたります。この節目に開催となりました本シンポジウムが飯盛城跡の歴史的価値についての理解を深め、今後の活用について検討する機会となれば幸いです。

令和 4 年 10 月 10 日

大東市長 東坂 浩一

# 飯盛城跡の考古学調査

## 1 飯盛城跡の立地

いもりじょうあと  
飯盛城跡は、大東市と四條畷市にまたがる飯盛山（標高 314.4 m）の山頂を中心に築かれた戦国時代末期の山城跡です。飯盛城跡が築かれた飯盛山は生駒山地から派生する支脈の北端部、四條畷市と大東市の境に位置しています。飯盛山の地質・かこうがんい  
岩体の大部分は花崗岩類で形成されています。



飯盛城跡近景 南西から

飯盛山の東斜面は緩傾斜の地形となり、山麓には山間部の室池を水源とする権現川が流れています。権現川は北麓でその流れを南西に変え、低地部で寝屋川と合流しています。西斜面は東斜面とは対照的に生駒断層崖によって急傾斜となっており、谷筋を流れる中・小河川によって形成された扇状地性の段丘が山地の西縁に分布しています。西麓の標高約 10 m 前後には東高野街道が南北に縦走し、大和に通じる街道として北麓に清滝街道、南麓に中垣内越道が東西に通ります。飯盛城が機能した 16 世紀後半には東高野街道の西側に深野池や新開池などの湖沼が広がっていました。

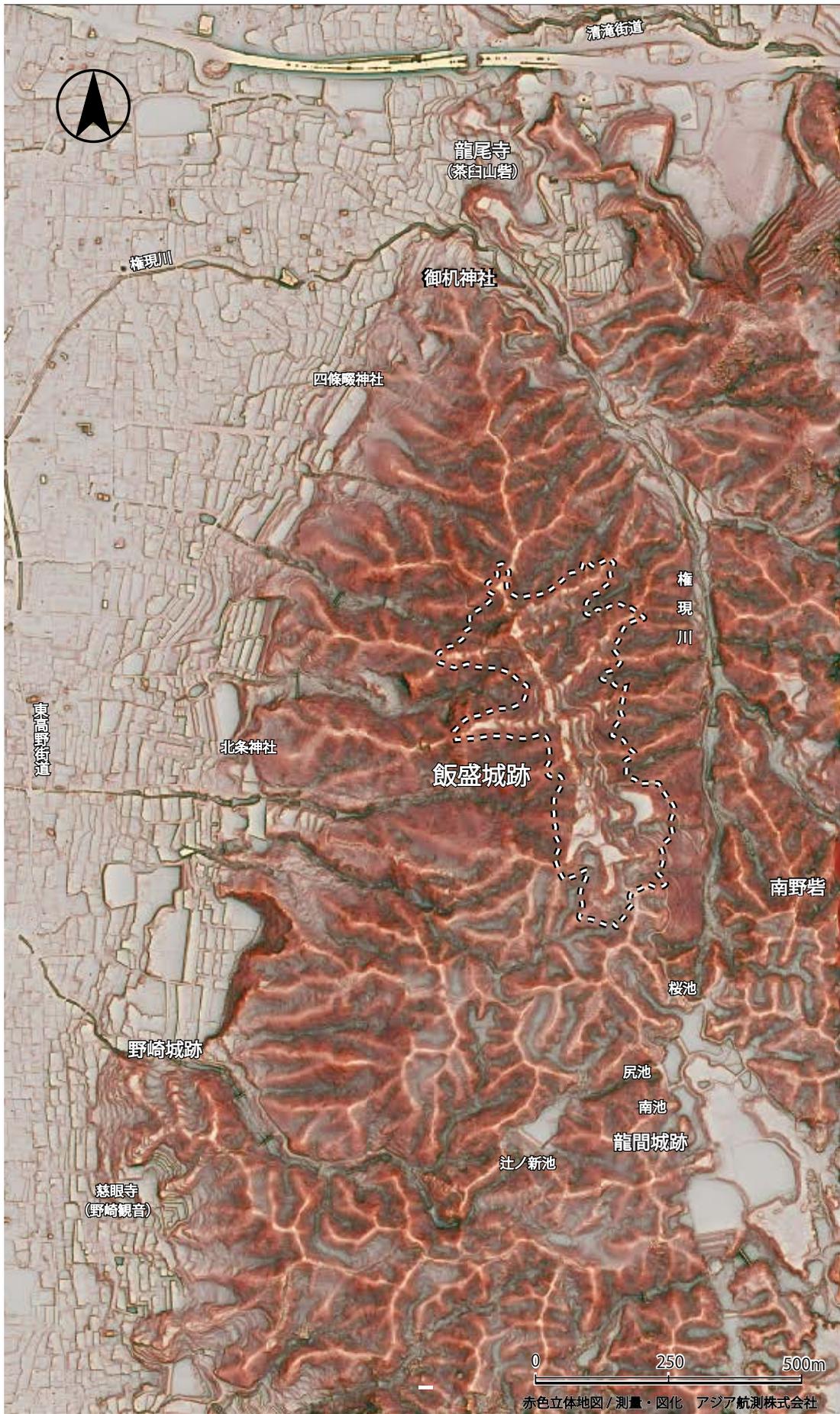
## 2 飯盛城跡周辺の関連遺跡

飯盛城の周囲には本城である飯盛城を守るため支城が築かれました。支城の機能を有したとみられる城には、飯盛城の東を守る狼煙台としての機能が推定される南野砦、長谷遺跡（四條畷市）の北西に存在した可能性のある権現山砦、西には深野池に存在した三箇の島に築かれた三箇城、東には大和への街道沿いを抑える田原城、北田原城、南方を守る野崎城、龍間城、北方を守る忍岡古墳を城郭化した岡山城、土砂採取で消滅した清滝山に存在したとされる清滝城、現在は龍尾寺が建つ茶白山砦が挙げられます。

飯盛城の南方を守る野崎城と龍間城は、平成 28 年度に実施した航空レーザ計測の成果によって遺構の現状が明らかになり、曲輪等の城郭遺構が残っていることが判明しました。

## 3 飯盛城跡の研究史

飯盛城跡は地元においては江戸時代以降、南野村と北条村の水論に関する絵図に曲輪と石垣が描かれるなど古城跡として認識されていたことが窺われます。城跡の本格的な調査は、昭和 5 年頃の大阪府史蹟調査会に同行した旧制四條畷中学校の教諭であった平尾兵吾を皮切りに、大阪府立四條畷高等学校地歴考古学クラブによる発掘調査や本田昇氏や中井均氏、中西裕樹氏などによる縄張り調査が行われ、飯盛城跡研究の基礎となりました。また、近年は文献史学の視点からも仁木宏氏や天野忠幸氏により飯盛城跡の研究が進められており、三好政権と飯盛城の関わりを紐解く作業が進められています。



赤色立体地図 飯盛山とその周辺

## 4 遺構の分布と構造

大東市・四條畷市が国史跡を目指して実施した総合調査では、飯盛城跡の城域と遺構の遺存状況を確認するため平成29年度から三カ年にわたり分布調査を行いました。飯盛城跡の構造については、中井均氏による先行研究により、主郭に相当するI郭（高櫓郭）の南側に設けられた主尾根を遮断する堀切によって北エリアと南エリアに分けられ、曲輪の機能に相違があったことが指摘されています。曲輪の機能は、北エリアは防衛空間、南エリアは居住空間としての利用を想定し、権現川から傾斜の緩やかな東斜面を上り、X郭（馬場）に至るルートを手前に相当する登城道であると推測しています。石垣についても、登城道から見える位置に築くことで城主の威光を示す「見せる石垣」であったことが指摘されています。総合調査ではこの研究に基づいて調査を実施しました。

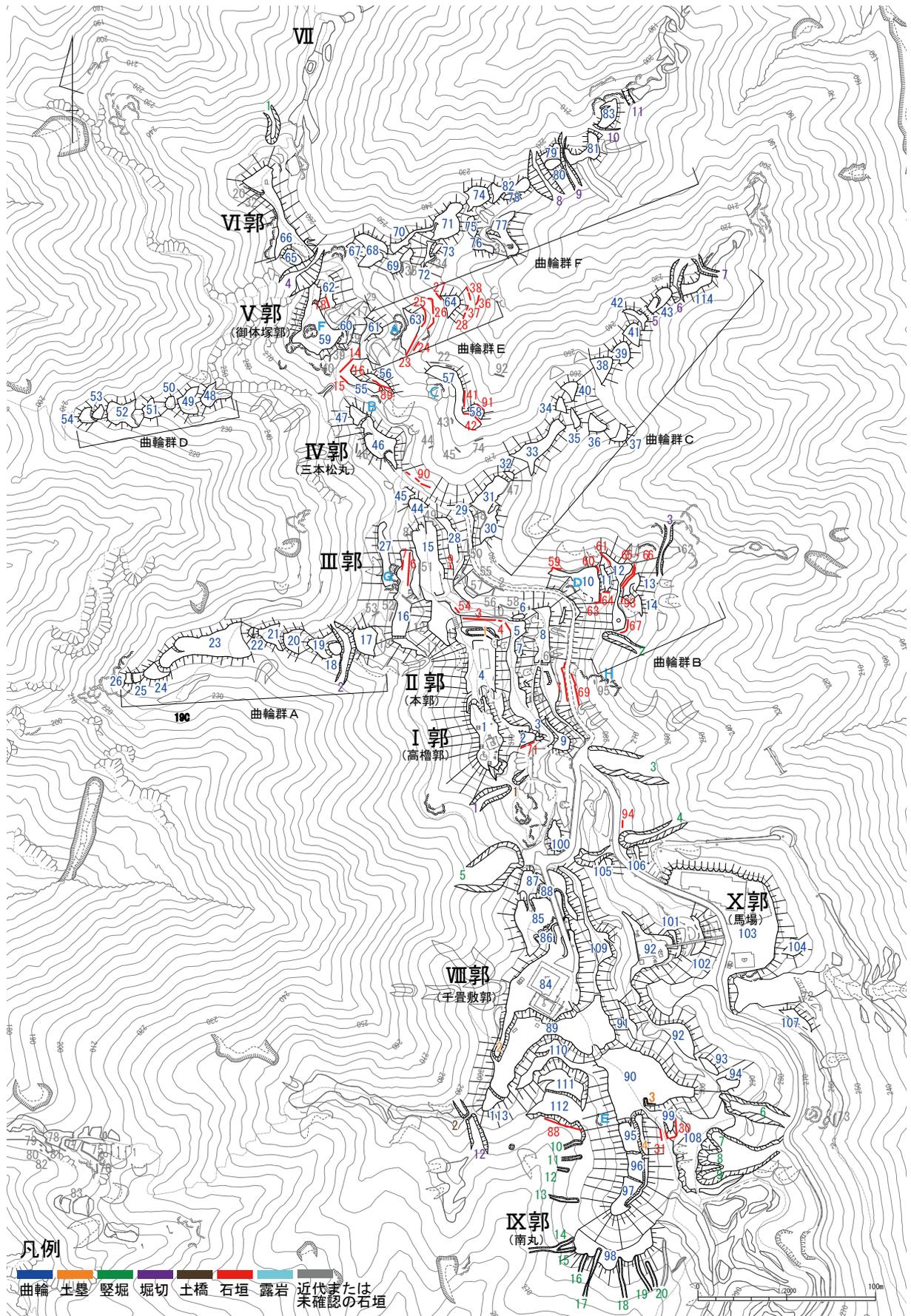
分布調査では、城郭遺構として曲輪114箇所、土塁4箇所、堀切12箇所、竪堀20箇所、石垣40箇所を確認しています。遺構の分布状況から、城域は東西400m、南北700mを測ることが明らかになりました。ここでは分布調査成果に基づいて飯盛城跡の遺構を見ていきます。

城を構成する遺構は、主尾根上にI郭（高櫓郭）からX郭（馬場）が構えられ、北側の主尾根から東西に派生する支尾根には小曲輪群が築かれています。I郭（高櫓郭）の南側には主尾根を遮断する堀切（竪堀4・5）が構えられています。

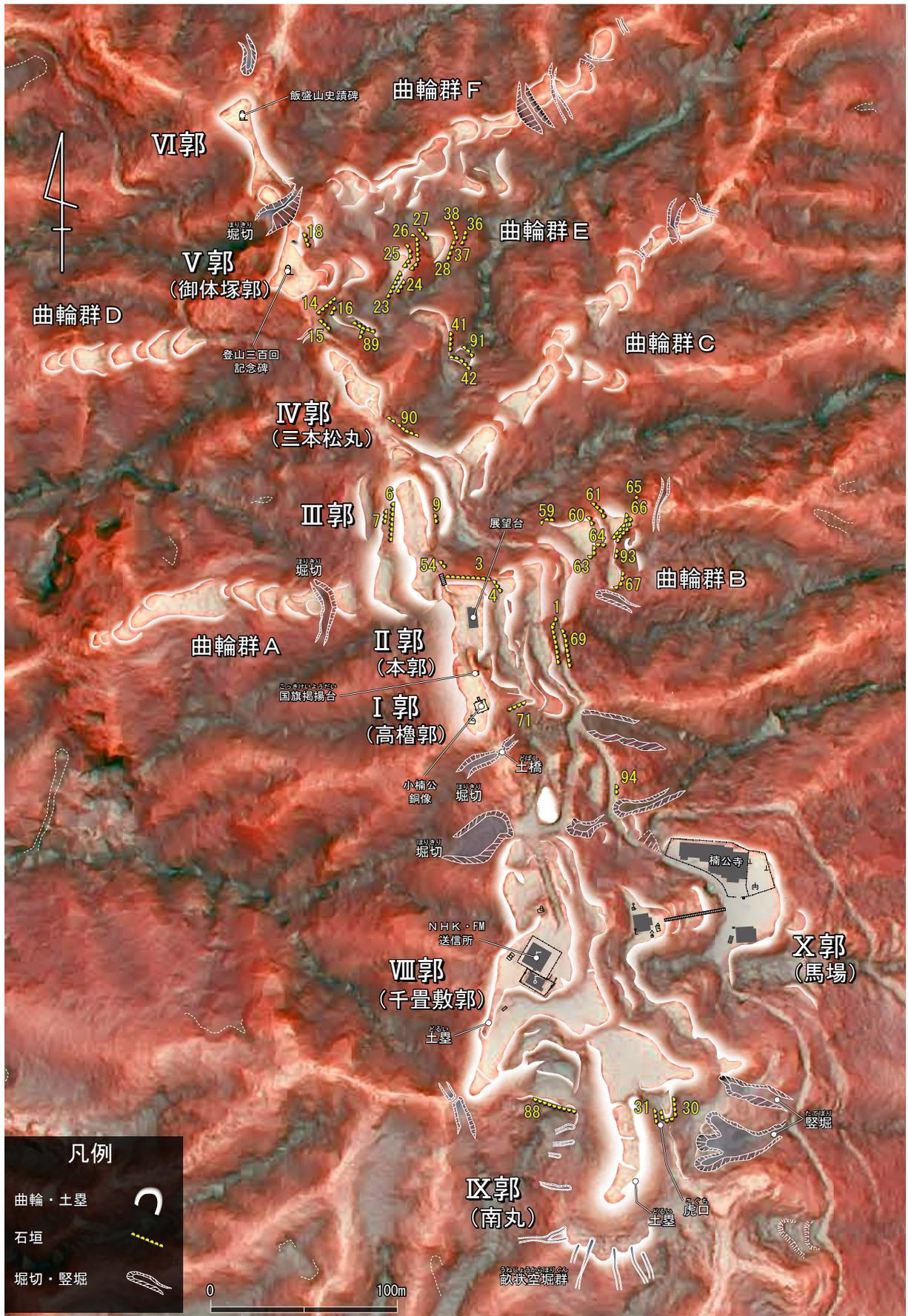
この堀切より北エリアには主尾根上にI郭（高櫓郭）からVI郭が構えられており、各曲輪は面積が狭く、曲輪間の比高が大きくなっています。宗教的な性格を持つ可能性のあるV郭（御体塚郭）の北には城内でも最大の堀切が構えられており、この堀切によって城の主要部分は隔てられていると見られます。主尾根から東西に派生する支尾根上には曲輪群Aから曲輪群Fが構えられており、西側は自然地形の急傾斜、東側は多重堀切（堀切3・5～11）として城域を限っています。また、各曲輪の斜面には多くの石垣が築かれています。

堀切より南エリアはVIII郭（千畳敷郭）・IX郭（南丸）・X郭（馬場）で構成されます。広大な面積を持つ曲輪が多く、傾斜の緩やかな東斜面には帯曲輪や腰曲輪が多く構えられます。北エリアと比較すると曲輪間の比高は小さくなくなり、支尾根に曲輪群は築かれていません。IX郭の切岸の下には敵状空堀群が構えられています。石垣は虎口とVIII郭の谷に築かれた曲輪斜面のみであり、北エリアと比較すると非常に少ないといえます。

IX郭の東側には東西に石垣が築かれた虎口が構えられています。いわゆる平入の虎口で複雑な折れなどは見られませんが、石垣の間の通路は西に湾曲しており、VIII郭全体を直接見通さないようになっています。虎口の東には曲輪99、西には曲輪95、正面には曲輪90が位置しており、侵入してきた敵を両側面と正面から攻撃することができる曲輪配置になっています。また、飯盛城跡には曲輪群Eの南方に石垣41と石垣42が築かれています。石垣41には2mを超える大きさの巨石が使用されており、鏡石と考えられます。石垣の間も開口しており、登城道と考えられる石垣89の上を通りV郭へ至る城道が想定されることから、東側の虎口である可能性が考えられます。



飯盛城跡遺構現況図



赤色立体地図 飯盛城跡部分（遺構を加筆）



飯盛城跡近景 南西から



飯盛城跡近景 北東から



I 郭（高櫓郭）（右）  
II 郭（本郭）（左）  
北西から



VI 郭上空から V 郭（御体塚郭）を望む  
南東から



V 郭（御体塚郭）  
南東上空から

V 郭北側 堀切 4  
南東から



石垣 41 (左奥)  
石垣 42 (右奥)  
石垣 91 (手前左)  
北東から



I 郭 (高櫓郭) 南側  
土橋 1 北から





Ⅷ郭(千畳敷郭)・Ⅺ郭(南丸)  
上空から(写真上が東)



Ⅺ郭(南丸) 北から



虎口 南から

## 5 飯盛城の石垣

これまで城の要所に石垣が築かれていたことは知られていましたが、分布調査によって城域で本格的な石垣が多数発見されました。分布調査をした範囲では95か所で石垣を確認しましたが、その中には近代に公園整備のために築かれたものや未観察のものが含まれています。これまでの調査によって城域内で確認された飯盛城に伴う石垣は40か所です。城域外では飯盛城跡に伴う石垣は発見されていません。

石垣の築かれた場所を見ていくと、北エリアの東斜面に集中していることがわかります。特にV郭と曲輪群E、I郭（高櫓郭）・II郭（本郭）と曲輪群Bに多くの石垣が集中して築かれている半面、西斜面にはあまり築かれていません。また、城の出入口である虎口には大ぶりの石材が使用されています（石垣30・石垣41）。東斜面には権現川からの登城道の存在が推定されており、虎口とともに人の往来が多い箇所であったと考えられます。石垣は多くの人を通る登城道や虎口から見える位置を選んで築かれたと考えられます。

測量調査と発掘調査の結果、石垣は自然石を垂直に近い勾配で積んだ野面積みで、排水機能を高めるために石垣の背面には栗石が充填されているものもあつたことがわかりました。石垣は勾配が垂直に近くなるほど高く積むのが難しくなります。そのため、飯盛城では一段目の石垣を積んだ後に平坦面を設けて二段目を積む段築状石垣とし、高く見せる工夫がされています（石垣1・69、石垣6・7、石垣23・24）。段築状となっている石垣は石垣6・7のように急傾斜地に築かれたものが見られます。これは地形的に崩れやすい場所の石垣を段築状とすることで高く見せると同時に構造を補強したと考えられます。延長の長い石垣では、崩れるのを防ぐために隅角部（出角（石垣69））が構築されています。

飯盛城に築かれた多くの石垣の石材はどこから採石されたのでしょうか。石垣を観察してみると石材に割った痕跡は認められません。分布調査を進めるうちに多くの石垣のそばに露岩が存在していることがわかりました。花崗岩は節理と呼ばれる自然の割れ目が発達しています。露岩の節理の間隔が付近に位置する石垣石材の大きさと近いことから、節理を利用して近くの露岩から石材を採石したと考えられます。



段築状の石垣（石垣23・24）  
写真：四條畷市教育委員会蔵



出角のある石垣（石垣69）



石垣 1 北から



石垣 69(全景) 南東から



石垣 65・66 東から



石垣 6・7 北西から



石垣 18 北東から  
写真：四條畷市教育委員会所蔵



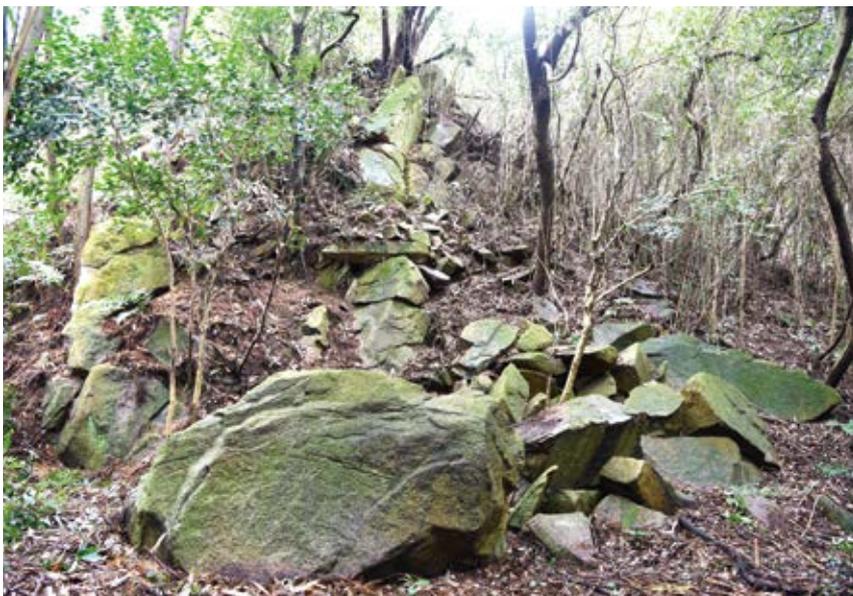
石垣 14 (右)・石垣 15 (奥)  
石垣 16 (左) 北東から  
写真：四條畷市教育委員会所蔵



石垣 41(手前)と露岩 C  
(上方奥) 東から



石垣 42 北東から



露岩 C 東から

# V郭（御体塚郭）とその周辺の調査成果について

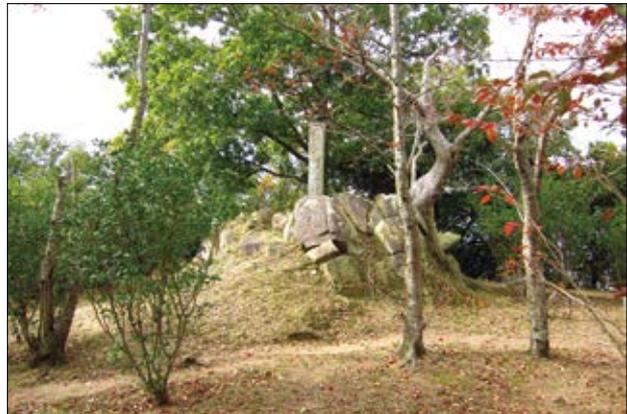
村上 始

(四條畷市教育委員会 スポーツ・文化財振興課)

## 1 御体塚郭（曲輪 59）の位置と特徴

この曲輪は城の北部に位置しており、城域北部では最高所の標高 287 m に位置します。この曲輪から北へ 17 m 程下ると幅約 15 m の堀切に至ります。

この曲輪の平面形態は菱形状で、その特徴は、曲輪の中央やや西寄りに花崗岩が盛り上がった様に露出（露岩）していることです。本来、曲輪はその機能から造成にあたって切り土や盛り土工事を行い、全体を平坦にしますが、城内ではこの曲輪のみ意図的に旧地形のまま中央に岩盤が残されています。



またこの露岩の西側の平坦面は狭く、その先は急斜面となっていることから、城が機能していた当時は西麓から露岩が見えていたと思われます。

V郭（御体塚郭）  
写真：四條畷市教育委員会所蔵

## 2 御体塚郭（曲輪 59）と周辺の調査成果

平成 28（2016）年度にこの曲輪の北東斜面に築かれた石垣 18 の測量調査を行った際に瓦が出土したことから、平成 29（2017）年度は、石垣 18 の上方の平坦面に長さ 3 m の L 字形の第 1 トレンチと 3 × 3 m の第 2 トレンチを設定し発掘調査を実施しました。

その結果、両トレンチにおいて、上面が平らな建物の柱を立てるための礎石そせきの可能性がある花崗岩が、整地層せいちそうの上に設置されているのを確認しました。また第 2 トレンチでは、多量の土師器皿はじきさらや土師器台付灯明皿はじきだいつきとうみょうざら、瓦質土器播鉢がしつどきすりばちとともに、銅銭どうせん、輸入磁器ゆにゆうじき、平瓦ひらがわらや丸瓦まるがわら、雁振り瓦がんぶり、塼せん、壁土かべつち、鉄釘てつくぎなどが出土しました。この調査成果からこの曲輪に建物が存在していたことが考えられたため、平成 30（2018）年度は、その確認を目的として、第 2 トレンチの南側に第 3 トレンチを設定して調査しました。

その結果、塼列建物せんれつたてもの（塼貼建物せんばりたてもの）に伴う塼（瓦に似た四角形の板状の焼き物）が直線状に設置された状態で出土しました。塼列建物とは、建物の土壁の裾に塼を貼り巡らせた建物です。塼の配置状況から建物の規模は、最大約 4 × 6 m に復元できました。

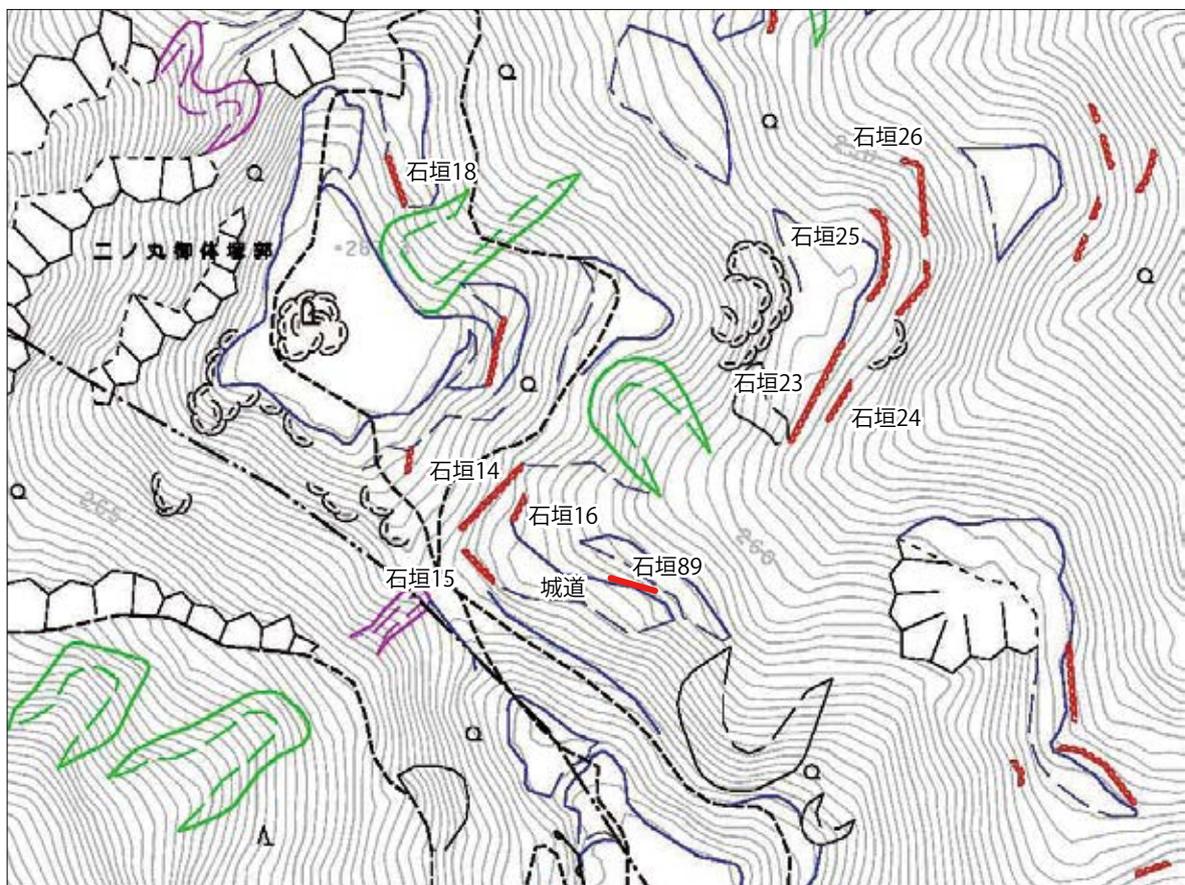
また塼列建物跡の北側において、それと同じ配置方向に並ぶ建物の基礎の可能性のある石組遺構を確認しました。

塼列建物は堺環濠都市さかいかんごうとしなどの遺跡で確認されており、その多くが土蔵どぞうとして使われたと

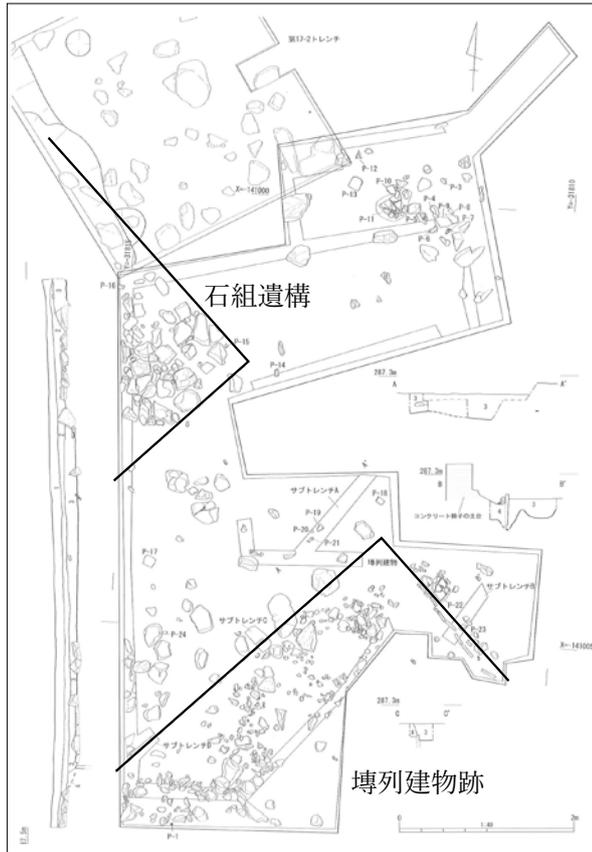
考えられています。しかし今回の調査では瓦の出土数が少なく、瓦は棟のみに葺かれていた可能性が高いことから、耐火構造が求められる蔵と想定することは難しいと考えています。このことから、この建物は置塩城（兵庫県姫路市）などで類例のある櫓である可能性が考えられます。

また石組遺構は、礎石列建物や礎敷建物と呼ばれる石組みの基礎構造をもつ建物の一部である可能性が考えられ、その機能については平成 29 年度の調査において、この建物の東側から宗教的な特異な用途が想定される土師器台付灯明皿が出土していることから、特殊な役割の建物であった可能性が考えられます。

このように平成 28 (2016) 年度から平成 30 (2018) 年度まで御体塚郭を中心とした場所を調査した結果、まず御体塚郭には少なくとも 2 棟の建物が建っており、そのうち 1 棟は櫓と想定される博列建物、もう 1 棟は宗教的な用途の建物であったと考えます。また石垣測量調査の結果、当時は御体塚郭の北から東・南側斜面に石垣が巡らされており、その東側尾根を中心とした曲輪群には、その斜面に数段におよぶ石垣が嚴重に築かれ、またその間には虎口のひとつと考えられる所からの城道しろみちが通じている壮大な曲輪群であることが判明しました。



御体塚郭と周辺の石垣



御体塚郭 遺構平面図



石組遺構出土状況  
写真：四條畷市教育委員会蔵



塼列出土状況  
写真：四條畷市教育委員会蔵



土師器台付灯明皿（中列中央）  
 瓦質土器搗鉢（後列左）  
 輸入磁器（前列）  
 土師器皿  
 写真：四條畷市教育委員会所蔵



雁振瓦（左）、丸瓦、平瓦  
 写真：四條畷市教育委員会所蔵

### 3 三好長慶と御体塚郭

天野忠幸氏は、長慶は永禄3年（1560）11月に飯盛城へ入城直後に、唯一神道を受け継ぐ公家の吉田兼右に、三好家の祖先である源義光が社頭で元服した由緒をもつ園城寺の新羅善神堂（新羅社）を勧請するための作法と費用を尋ねていると指摘されています。

また中井均氏らが指摘されている、観音寺城（滋賀県近江八幡市）、小谷城（滋賀県長浜市）、小牧山城（愛知県小牧市）、岐阜城（岐阜県岐阜市）、安土城（滋賀県近江八幡市）などのように、城郭が巨石や磐座が所在する信仰の地に築かれていることがあるという点から、御体塚郭の露岩も同様に磐座信仰に関連すると考えられます。

以上のことと調査成果から、御体塚郭にはそれらに関する建物が建てられた宗教的な場所であったと考えられます。

長慶は永禄7年（1564）7月4日に死去し、そのことは隠された『細川両家記』に記されています。このことから、宗教的な性格がある御体塚郭が、遺体を仮埋葬（安置）した場所との伝承につながったのではないのでしょうか。

## VIII郭（千畳敷郭）・IX郭（南丸）・虎口の調査成果について

李聖子（大東市）

### 1 VIII郭（千畳敷郭）・IX郭（南丸）の位置と特徴

VIII郭・IX郭は居住空間が想定される南エリアに位置しています。VIII郭（千畳敷郭）は南エリアでは最高所に位置しています。飯盛山FM送信所の建つ曲輪が最も高いところに築かれた曲輪で、標高は約310mを測り、主尾根上に築かれた曲輪と東側の帯曲輪、谷部に築かれた曲輪で構成されます。



VIII郭（千畳敷郭）からIX郭（南丸）を望む

IX郭（南丸）はVIII郭の南側、城域の最南端に位置します。南に向かって低くなる3段の曲輪で構成されており、東縁辺には約33mに及ぶ土塁が築かれ、南側の切岸には畝状空堀群が構えられています。IX郭の東側には東西に石垣が築かれた虎口が位置しており、城の南側を防備していたと考えられます。

### 2 VIII郭（千畳敷郭）の調査成果

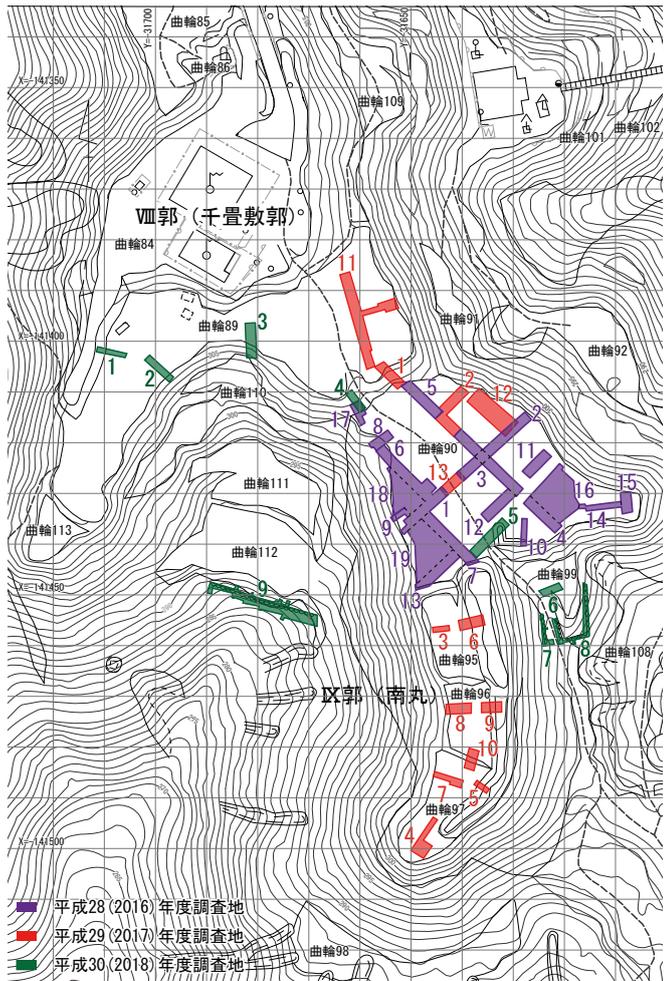
居住空間が想定されるVIII郭では、平成28年度から平成30年度にかけて曲輪の上に建てられていた建物を確認するため、曲輪89と曲輪90の発掘調査を実施しました。調査の結果、<sup>さくじ</sup>作事の遺構として、岩盤を掘り込んで据えた建物の柱を支える礎石を発見しました。建物の規模を確認するには至りませんでした。壁土が出土していることから、礎石立ちの土壁建物の存在が推定されます。また灯明皿として使用された土師皿や調理具、茶道具などが出土しました。曲輪90の18-5トレンチでは、<sup>れき</sup>礫が発見されています。トレンチの東側には土塁3、西側には土塁4が位置し、トレンチを設定した場所は曲輪へ入る開口部となっています。このことから曲輪90の虎口であり、発見された礫は虎口を補強するための<sup>れきじき</sup>礫敷であった可能性が考えられます。

<sup>ふしん</sup>普請の遺構では曲輪を造成する<sup>もりど</sup>盛土の遺構を確認しました。盛土は深いところでは約2m盛られている箇所もあり、もとはやせ尾根であった山頂を削り、その土を斜面に盛る大土木



VIII郭 礎石検出状況

工事により曲輪の面積を確保したことが明らかになりました。また、谷部分に築かれた曲輪の斜面からは石垣が発見されました。全長が約22mある直線状の石垣で高さは最大で約4mを測ります。虎口以外の石垣が確認されなかった南エリアで石垣が発見されたことで城域全体に石垣が取り入れられてた本格的な石垣づくりの城である可能性が高まりました。



VII郭・IX郭トレンチ配置図



VII郭(千畳敷郭)曲輪 90 18-5トレンチ 北東から



曲輪 112 18-9トレンチ 石垣 88 南東から



曲輪 90 17-2トレンチ 曲輪を造成する盛土

### 3 IX郭（南丸）・虎口の調査成果

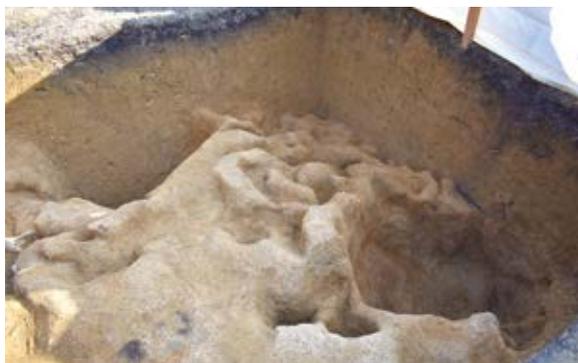
IX郭（南丸）では、土塁の構築状況と曲輪の造成を確認するために発掘調査を行いました。調査の結果、作事の遺構として曲輪95の西端で礎石を発見しました。礎石は焼土層で覆われており、焼土の中からは大量の壁土と茶道具の風炉の破片、犬形土製品や土師器皿などが出土しました。最南端に位置する曲輪98の南端では直径約1mを測る建物の柱穴を3基発見しており、この建物跡は復元すると柱間2.1mの1間×1間の方形の櫓であった可能性が考えられます。曲輪97の17-10トレンチでは炉床とみられる遺構やトリベが見つっています。トリベの内側には鉄が付着していることから、小規模ながら鉄の鋳造が行われていたと見られます。



IX郭曲輪96・97 17-5(左)・17-7(右)・17-10(手前)トレンチ全景

普請の遺構としては、Ⅷ郭と同様に曲輪を造成する盛土の遺構を確認しています。IX郭の土塁は岩盤を削り出して作られており、この切土の際に出た土を曲輪を造成する盛土として利用したと推察されます。

IX郭の東に位置する虎口では、東西に築かれた石垣の規模と虎口に伴う施設を確認するために調査を行いました。調査では虎口に伴う門などの施設は確認されませんでした。石垣30が曲輪99の斜面を取り巻くように築かれていることが明らかになりました。また、根石が築く石よりも前にせり出して据える顎止め石となっていることを確認しています。



曲輪97 17-4トレンチ 柱穴検出状況



曲輪95 17-6トレンチ 土塁



曲輪97 17-7トレンチ出土 壁土



曲輪96 17-10トレンチ出土 トリベ



虎口 石垣 30 南西から



石垣 30 (曲輪 99 東斜面)



石垣 30 顎止め石(曲輪 99 南斜面)



虎口 石垣 31 東から

#### 4 調査成果からみたⅧ郭・Ⅸ郭

飯盛城に三好長慶<sup>みよしながよし</sup>が居住していたことは文献にも記されており、広く知られていました。また、中井均氏は縄張り研究から城の南エリアが居住空間として機能していたことを指摘しています。

Ⅷ郭で実施した発掘調査では、礎石と日常生活用具、茶道具が発見されたことで、従来より指摘されてきた居住空間であったことが考古学調査からも裏付けられたといえます。また、長慶は飯盛城でたびたび連歌会を催していたことが分かっています。その会場となった建物は広大な面積を持つⅧ郭であったと推察されます。居住空間であり政治の場でもあったⅧ郭のすぐ南に虎口が位置するという構造上、畝状空堀群を備え、櫓が建てられていたⅨ郭が南エリアの防御を担ったと推察されます。

発掘調査で確認した普請の遺構からは、やせ尾根であったところを大規模な土木工事によって広い面積を持つ曲輪を造成し、本格的な石垣を築いたことが明らかになりました。調査成果からは三好氏が持つ高度な土木技術と政治戦略の一端をうかがうことができます。

# 飯盛城の城郭史上における位置付け

中井 均 (滋賀県立大学名誉教授)

## はじめに

2021年10月11日、飯盛城跡は国史跡に指定されました。大阪府下最大級の戦国時代の山城遺跡がようやく認められたのです。この史跡指定に関して大東市、四條畷市では2015年度より2019年度の5ヶ年にわたって専門委員会を設置して総合調査を実施しました。総合調査では発掘調査、文献調査はもちろんのことですが、全山を詳細に踏査され、城跡の全貌が明らかにされました。

これまで大阪府最大級としての評価はされてきましたが、この総合調査によって規模だけではなく、城郭構造も明らかにすることができました。その最大の成果は織田信長によって天正4年(1576)に築かれた安土城に先行して石垣が用いられていたことでしょう。これまで戦国時代の山城は基本的には山を切り盛りして築く「土の城」として位置付けされてきたわけですが、飯盛城跡での石垣の検出はその常識を大きく塗り替えるものとなりました。

ここでは飯盛城跡の調査成果を中心として日本城郭史上に位置付けをおこなってみたいと思います。

## 飯盛城の構造

はじめにこれまで明らかにされた飯盛城の構造についてみておきたいと思います。飯盛城は河内の東端に位置する生駒山から派生する標高314m(山麓からの比高約300m)の飯盛山に築かれています。西側山麓にはかつて深野池と呼ばれる河内潟が淡水化した巨大な池が広がっていました。大阪方面から東を望むと屏風のようにそそり立つ山頂に築かれていたわけです。

ところで比高300mというのは山城でも非常に高い部類に属します。土豪、国人の山城は比高100m未満程度が大半であり、飯盛城が比高からだけでも戦国大名クラスの山城であったことがわかります。

飯盛城は1967年に刊行された『日本城郭全集』などで南北朝時代に築城されたとありますがその史料的な根拠はなく、最も古い史料としては享禄3年(1530)に木沢長政の居城であったことが『実隆公記』に見えます。現存する遺構については基本的には永禄3年(1560)に飯盛城を居城として入城した三好長慶によって改修されたものと考えられます。

南北に細長い飯盛山の山稜を利用して曲輪が配置され、その規模は南北約700m、東西約400mに及んでいます。この曲輪配置は南北で大きく異なっており、それが飯盛城の構造の基本となっているようです。

山稜部にはI～X郭の10ヶ所の曲輪群が直線的に配置されています。さらにⅧ郭とI

郭の間、IV郭とV郭の間、V郭とVI郭の間には巨大な堀切が構えられています。特にVIII郭とI郭間の堀切は巨大で二重に構えられており、この堀切を境として城域は南部と北部に区画されていたことがわかります。

南部のVIII郭は千畳敷と呼ばれているところで、5段から構成されています。その通称名の通り居住空間として構えられた曲輪群と考えられます。なお、VIII郭の居住空間を防御するために構えられたのが通称南丸と呼ばれるIX郭です。

一方北部は最高所に構えられた通称高櫓郭と呼ばれるI郭が主郭となり、II郭からVI郭までが防御空間としての詰城部分つめじろであったと考えられます。いずれもVIII郭に比べると極めて小面積の曲輪です。これは防御施設であることを示していると見られます。曲輪の南北に堀切を構えているV郭については北部の曲輪群内でも特別な空間であったことを示唆しています。

こうした南北に伸びる山稜の主要部に対して東西に派生する曲輪群が構えられています。自然地形によるものとは言うものの、派生する尾根筋に曲輪群を配置するのは北部に集中しています。III郭の西に伸びる曲輪群A、東に伸びる曲輪群B、東北に伸びる曲輪群C、V郭の西に伸びる曲輪群D、東に伸びる曲輪群E、東北に伸びる曲輪群Fです。これらの曲輪群には堀切も設けられており、山麓からの攻撃に備えています。

ところで飯盛城では城域を限る堀切が北端部と南端部に設けられていません。これは飯盛山の高さそのものを切岸面として意識していたものと考えられます。特に北端は急斜面となっています。また、南方については桜池南方さくらいけの尾根頂部に城郭が構えられ(龍間城)、飯盛城に取り付く野崎には15世紀に築かれた野崎城が位置しています。野崎は飯盛城の南方防御の要であることより野崎城も飯盛城防御の城として維持管理されていたものと考えられます。

## 山城に住む

次にこうした飯盛城の構造について位置付けをおこなってみたいと思います。飯盛城は南部の居住空間と北部の防御空間から構成されています。戦国時代の山城は戦時の防御空間である詰城と、平時の居住空間である山麓居館さんろくきょかんという二元的構造となっています。その典型例が越前の一乗谷朝倉氏遺跡です。山麓さんろくの義景館よしかげやかたと山頂いちじょうだにじょうの一乗谷城から構成されています。近江の小谷城おだにじょうでも山麓の清水谷しみずやまじょうに構えられた御屋敷おやしきと山頂の小谷城から構成されています。また、近江湖西の清水山城しみずやまじょうは守護佐々木氏の庶子家である高島七頭たかしましちがしらの越中氏えっちゅうしの居城で、山腹部と山麓部に居館を構え、山頂部には堅堀を設けた山城が構えられています。

ところが飯盛城では本来山麓に構えるべき居館を山城に構えていたのです。1565年に飯盛城を訪れたアルメイダは、「船を降りると、すでに駕籠が私を待っていた。駕籠を担ぐ人々は甚だ急いで道を進んだが、大きな杉や松の森に覆い尽くされた山の中で夜になった。さっそく、山頂から松明が届けられ、これにより私を運んでいた人たちは、六名であったが、道中の難儀をさほど感じなくなった。すでに夜も更けた頃、山頂に到着し、我らは司

祭や件の貴人、およびその家族から多大な歓喜と満足をもって迎えられた。」(『十六・七世紀イエズス会日本報告』第Ⅲ期二巻、ルイス・デ・アルメイダ修道士がルイス・フロイス師と共に都へ旅したことにつき、福田で(イエズス)会の修道士らにしたためた書簡、1565年10月25日付)と記しており、アルメイダらが山頂に向かったことがわかります。さらに多くの人たちが山上で暮らしていたこともうかがえます。

総合調査でⅧ郭からは近世以降の攪乱によって礎石建物を検出することは出来ませんが、礎石や分厚い整地層せいちそうが検出されており、居住施設としての礎石建物が存在していたことはまちがいないようです。

三好長慶が飯盛城に居城を移すまでその本拠あくたがわじょうとしていた芥川城からは山頂の主郭から礎石建物が検出されています。建物は東西4.5間×南北3間以上の礎石建物で、中央部の東西柱列が棟通りとみられ、南北方向の礎石列とあわせて内部が区画されています。北半分は西側の2.5間×2間、東側の2間×2間の2室に分かれています。南半分も西側が2.5間×1間以上、東側が2間×1間以上の2室で合計4室からなる建物であったと考えられます。芥川城でも山麓には居館の想定地が認められないことより、この主郭で検出された礎石建物が長慶の居住空間であったとみてまちがいありません。

ところで二元的構造の典型とした小谷城、清水山城など戦国時代後半の山城では山麓の居館だけではなく、山城にも礎石建物が設けられ居住空間としていました。山上の礎石建物という構造のみを見ると芥川城や飯盛城と同じように見えますが、重要な点は同様に山上に礎石建物を構えています。芥川城や飯盛城では山麓に居館を設けなかったことに対して小谷城、清水山城では山麓にも居館を構えていたことです。

おそらく小谷城や清水山城、さらには一乗谷朝倉氏遺跡では戦国時代の二元的構造よりも発達した構造を示していたものと考えられます。それは山麓の居館を対面の場として正式な主殿とし、山頂の礎石建物は私的な居住施設として構えたものだったのでしょうか。あるいは恒常化、大規模化する戦争への対処として、戦国大名や有力国人は平時から女性や子どもたちを山城に住まわせていたのかもしれませんが。

しかし芥川城、飯盛城では山上部のみにしか居住空間を有していません。ここに同じ山上に礎石建物を構える山城でも大きく異なる構造であることがわかります。戦国時代の山城と居館の関係はこのように詰城と居館という二元的構造から、詰城にも居住空間を設け、山麓の居館も維持するという



千畳敷の調査  
写真：筆者撮影

二元構造へと変化することが明らかになりました。しかし、長慶の築城では山麓の居館を捨て去り、山城への一元化を図ったのでした。

## 石造りの城

はじめに記したように飯盛城の最大の特徴は石垣です。日本における城郭への石垣の導入については天正4年(1576)に織田信長によって築かれた安土城がその嚆矢とされてきました。確かに信長による石垣の構築は以後の日本の城郭に大きな影響を与えました。しかし、近年の調査によって安土以前にも日本では石垣によって築かれた城郭の存在することが明らかになってきています。

もう少し石垣の構造に注目すると、石が積み重ねられている背面に拳大の石を充填するものと、地山に直接石を積み上げる構造のものに分類することができます。前者を石垣と呼び、後者を石積みと呼びたいと思います。そこには技術の差、すなわち職能集団関与の有無を指摘することができるようです。芥川城、飯盛城では裏込め石<sup>うらご</sup>の存在が確認されており、石垣として積まれたことがわかっています。

戦国時代の石積み、石垣については近江の守護佐々木六角氏<sup>しゅごささきろっかくし</sup>の居城である観音寺城<sup>かんのんじょう</sup>ではほぼ城域全体に石垣が用いられていますが、それ以外の城では本丸周囲、虎口部分と極めて限られたところのみ石積み、石垣が築かれています。芥川城でも総合調査の結果、従来知られていた場所以外からも点々と石垣が確認されています。しかし、まだ城域全体にはおよんでいません。それが飯盛城ではほぼ城域全体に石垣の用いられるようになります。



石垣の折  
写真：筆者撮影

長慶の築城は信長と同じく石の城を指向していたものと見られます。

飯盛城の石垣構築技法ですが、石材は基本的には自然石もしくは粗割石あらわりいしを用いています。この粗割石は露頭する飯盛山の花崗岩の節理を利用して割り取っています。石を積む際、地業ちぎょうはなされておらず、根石ねいしも持たず、基底部の石を地上に据えて石材を積み上げるのみとしています。石材を積むにあたっては控えひかに対して小口部こぐちぶに大きい面を揃えています。勾配は垂直に近く直線的です。こうした工法は戦国時代の日本全国の石積み、石垣に共通するものです。

飯盛城の石垣で注目されるのは長く直線的に積む箇所おりに意識的に折を設けている点です。折の出隅部ですみぶには方形の石材を用いているのですが、長辺と短辺とを交互に積み上げる算木積みさんぎづにはなっていません。ではなぜ折を構えるのでしょうか。従来石垣や土塁るいせんの塁線の折は側面から射撃するための横矢よこやという軍事的防御施設として理解されてきました。ところが飯盛城の折は一石分のみで折り曲げており、とてもその上部に兵を配置できるものではありません。恐らく垂直に積み上げた直線的な石垣は崩落する可能性が高いため、意識的に折をつけて補強し、石垣の崩落を防ぐ目的で構えられたものと考えられます。近江の観音寺城にも長く直線的な石垣が構えられていますが、折は設けられていません。こうした技法から飯盛城の石垣は戦国時代に最も発達した石垣と評価できます。

今一つ石垣で触れておかねばならない点があります。戦国時代の石垣には観音寺城のように石材に長辺1mを超える巨石を用いている事例が認められます。芥川城でも大手の谷筋に配された高石垣には巨石が用いられています。飯盛城では巨石使用は非常に少ないのですがそれでも曲輪群Eの先端部やⅦ郭南端の虎口部分かがみいしに用いられています。いずれも虎口に伴う石垣に用いられていることより鏡石としての巨石であったと見られます。

## 磐座としてのV郭

V郭は曲輪中央部に岩盤が削り残されています。これは曲輪構造としては極めてイレギュラーな造りです。曲輪とは山を切って平坦面を確保し、兵の駐屯地ちゅうとんちとするものです。どうもV郭は平坦面を造成するのを途中でやめたのではなく、意識的に中央の岩盤を削り残しているようです。さらにV郭では南部、北部に堀切を設けて独立峰としています。飯盛城のなかで曲輪両側に堀切を構えるのはV郭以外では存在しません。V郭は極めて特殊な曲輪であったことがうかがえます。

『大阪府全志』（井上正雄 1922）に「又其の少し北位に御体塚といへるあり、中心壱坪許高くして石垣を繞らせり。是れなん三好長慶の墓にあらざるか、長慶は当城に病死したるも喪を秘せしこと二年余に及びしといへば、其の逝きしことの外に洩れんことを慮れて此に葬りし為め、意味ありげなる此の塚名を残せるものなるかの如くに想はる」とあります。近代の地誌ですが、地形の不自然さを長慶の墓と考えています。

『大阪府全志』では石垣と記していますが実際は岩盤であり、墓でないことは明らかです。これは墓標ではなく、磐座いわくらとして削り残されたものと考えられます。同様の構造が各地の城

跡でも見られます。例えば近江守護六角氏の居城である観音寺城では観音正寺奥の院の岩窟や女良岩、三国岩、万石岩などが本丸背後の織山きぬがさやまに林立しています。また、織田信長の岐阜城では永禄12年(1569)に岐阜を訪れた山科言継やましなとぎつぐが信長の案内で「上之権現」を見学しています。現在の岐阜城でも本丸は平坦に削平されておらず復興天守閣の東面には岩盤が露頭しています。これこそ「上之権現」の祀られていた磐座と見てよいと思います。

また、岐阜城の北方尾根丸山には烏帽子岩と呼ばれる三角錐の岩盤があります。この地は伊奈波神社いなばじんじゃの故地でしたが、齋藤道三さいとうどうさんが稲葉山築城に際して現在の社地に移転したと言われています。岐阜城が磐座の聖地に築城されたことを物語っています。

ところでV郭では発掘調査で興味深い遺構と遺物が出土しています。磐座と見られる岩盤の南東側平坦面から石組遺構と塼列建物が検出されています。石組遺構は磐座の前面に配された社殿きだんの基壇せんれつたてものとも見られ、塼列建物はその後方の本殿のような施設だったのかも知れません。

塼列建物とは塼貼建物とも言われ、戦国時代に堺や京都などの都市遺跡から検出されています。蔵の基礎と見られ、防火・湿気対策として塼が埋め込まれたものと考えられます。山城からも河内高屋城たかやじょう、摂津端谷城はしたにじょう、播磨置塩城おじおじょう、感状山城かんじょうざんじょうなどから検出されています。端谷城では主郭の中心建物に付属するような建物として検出されており、内部からは15領もの甲冑かっちゅうが出土しました。武具倉として利用されていたのでしょう。感状山城では山腹の曲輪から埋甕遺構うめがめとともに検出されており、食糧庫として構えられたのではないかと見られます。

芥川城でも発掘調査の結果、主郭南側の一段低い副郭から塼列建物が検出されています。



御体塚郭  
写真：筆者撮影



御体塚郭で検出された埴列建物  
写真：筆者撮影

櫓ではないかとも見られていましたが、曲輪墨線上ではなく曲輪の中心部に配置されていることより櫓ではなく、やはり倉庫として築かれたものと見られます。

飯盛城ではV郭の構造より祭祀の建物に用いられたものと考えられます。

出土遺物に注目すると脚付土師器皿という珍しい器形の土器が出土しています。

口縁部に煤が付着していることより灯明皿として用いられたものです。普通の灯明皿ではなく、脚を付けた皿からもV郭が何らかの祭祀の場であることは明らかです。

さらに『兼右卿記』には永禄3年(1560)に松永久秀が吉田兼右に三好氏の先祖である源義光が社頭で元服した新羅善神堂の勧請の作法と費用を尋ねていることが記されています。あるいはV郭の石組遺構と埴列建物はこの新羅善神堂の可能性も十分に考えられます。

## おわりに

飯盛城では山城に長慶の居住していたことが明らかとなりました。従来のように山麓居館に住むのではなく、山頂に住んでいたのです。山麓より見上げさせ、自らは山上より見下ろすことを意識した構造であったと思われます。

また、長慶は石造りの城を指向し、ほぼ城域全体を石垣によって築きました。裏込め石の充填、折の設定などから高度な職能集団による構築が考えられます。近江の観音寺城の石垣構築には金剛輪寺など湖東の寺院の技術関与が認められていることから、長慶も築城について京都の職能集団を動員した可能性が考えられます。

V郭では築城に際して聖地を設けることが明らかとなりました。これまで城郭研究では軍事的防御施設という本質論からこのような宗教的な施設が研究されることはほとんどありませんでした。城郭内部で祭祀の空間が明らかにされた意義は重要です。

飯盛城ではこのほか瓦の出土も注目されます。安土築城以前の城館跡からも瓦が出土する場合がありますが、それらは極めて限定的に用いられています。ところが飯盛城ではほぼ城域の全域から出土しており、城郭建物に瓦の葺かれていたことが明らかとなりました。瓦という寺院建築に用いる道具が飯盛城で用いられている点からも築城に際して長慶が職能集団を動員していたことがわかります。

このように飯盛城は日本城郭史の画期となることは明らかで、極めて重要な位置を占めていることはまちがいありません。

# 飯盛城主と下剋上

天野 忠幸 (天理大学准教授)

## はじめに

ポルトガル人宣教師のジョアン・ロドリゲスは日本語に堪能で、豊臣秀吉にも拜謁しました。そして、1620年頃からイエズス会の命令で『日本教会史』の編纂に取り掛かり、日本研究を進めます。その中で、河内について「天下 Tenca を治めていた三好殿 Miyoxidono の時代に身分の高いキリシタンが多くいて、この三好殿 Myyoxindoni の宮廷である飯盛 Ymory の都市と城とがこの国にあった。」と述べています。ロドリゲスは、バテレン追放令を出した大坂城の豊臣秀吉に、キリスト教の布教を公認した三好長慶を対置したのです。

京都で迫害されていたキリスト教宣教師たちは、飯盛城に赴き、長慶の保護を得ることで、心おきなく布教できるようになりました。特に、飯盛城に居住していた長慶の被官たちが改宗したことで、後に長崎で殉教した二十六聖人（「聖パウロ三木と仲間たち」）などに続いていく、河内キリシタンが誕生します。このため、飯盛城はキリスト教布教の「聖地」と評価されたのでしょう。

1588年、スイスのルツェルン州の行政長官キサトゥスは、イエズス会士の書簡や報告をもとに『日本諸島実記』を刊行しました。これに付載されたのが、ヨーロッパで印刷して刊行された最古の日本専図です。ここには Imoris (飯盛) と西麓にある深野池周辺の Sanga (三箇) や Ocaiyama (岡山) が記されています。

また、飯盛城は「天下」を治める三好氏の居城とあります。そもそも「天下」は、平安時代には天皇が直接統治する洛中を指しましたが、承久の乱後、幕府が所在する鎌倉が加わりました。15世紀には、天皇と将軍が居住する京都が「天下」と認識されています。16世紀後期になると、五畿内の領主となった者を天下人とする認識が広がりました。

飯盛城は如何にして、天下人の居城となっていったのか見ていきます。

## 1 木沢長政

室町時代、「室町殿御分国」と呼ばれた中部・近畿・中国・四国地方の守護は、足利将軍を支えて、常時在京していました。そのため、これらの地域では守護の館や城郭は、さして発展しませんでした。しかし、応仁の乱後、西軍の有力大名でした畠山義就が幕府に復帰することなく、河内を占領すると、誉田 (羽曳野市) に居館を構えます。その子の義豊は、高屋城 (羽曳野市) を整備しました。後に、義豊の宿敵の畠山尚順が高屋城に入城したことで、高屋城は南近畿の政治拠点としての地位を確立します。それに対して河内北部は、幕府の財政を支える巨大荘園が所在し、摂津や丹波を治める細川氏が度々侵入したため、河内守護である畠山氏が安定的に支配できない地域でした。

16世紀の畿内周辺では、足利将軍家、細川・畠山の両管領家がそれぞれ二つに分裂し、

合従連衡を繰り返していました。大永七年(1527)には、堺の足利義維・細川晴元・畠山義堯方と、京都の足利義晴・細川高国・六角定頼方が争う状態となります。そうした中、木沢長政が飯盛城主として突如登場しました。享禄三年(1530)、長政は細川晴元の命令によって、軍勢を率いて京都に攻め上りました。公家の鷲尾隆康によると、長政は畠山義豊の孫の義堯の被官でしたが出奔し、細川高国に属して武功を立てた後に、細川晴元の被官になったとしています。下京では長政を皮肉り、「近江までとらんといつる木沢殿 いひもり山を人にくはるな」という狂歌が詠まれました。幕府や細川氏、畠山氏の勢力が混在する河内北部に割拠した長政の威勢と共に、旧主の畠山義堯との対立を抱えた危うさが垣間見えます。

享禄四年(1531)、飯盛城の長政は畠山義堯や細川晴元の被官の三好元長の軍勢に囲まれました。この時は細川晴元の援軍により、長政は窮地を脱することができました。しかし、享禄五年(1532)にも畠山義堯と三好元長が飯盛城に攻め寄せました。細川晴元は本願寺証如に支援を要請すると、証如の命令を受けた一向一揆が起こり、畠山義堯や三好元長を自害に追い込んだのです。

政敵を葬った長政は、飯盛城に畠山義堯の弟の在氏を置き、高屋城の遊佐長教と結んで、河内を共同支配します。また、山城では南部の久世・綴喜・相楽の三郡の守護代となり、天文三年(1534)には京都の西に位置する峰ヶ堂城(京都市西京区)も押さえます。さらに、天文五年(1536)には信貴山城(奈良県平群町)を築いて居城とし、本格的に大和へ勢力を拡大していきました。そのような長政を、本願寺証如は興福寺に代わる守護と認識しています。さらに長政は天文十年(1541)に、二上山城(太子町、奈良県葛城市)を改修しました。こうして、長政は生駒・金剛山地の山城を拠点に、河内・山城・大和を勢力圏に収め、陪臣でありながら、将軍足利義晴と直接関係を結んでいきます。

## 2 畠山在氏と木沢左馬允

木沢長政に擁立され、飯盛城主となった畠山在氏は、天文六年(1537)より河内の守護として活動を始めると、「飯盛御屋形様」と呼ばれました。飯盛城は管領家でもある畠山氏が居城し、河内全体の支配に携わる公的な城郭としての格式を得たのです。在氏は、長政の父の浮泛や、長政の長弟である中務大輔、次弟の左馬允らに補佐されました。

長政は権勢を誇っていましたが、天文十年(1541)に、木沢左馬允の義父の伊丹親興が細川晴元に背いたことで孤立していきます。そして、天文十一年(1542)の太平寺(柏原市)の戦いで、遊佐長教や細川晴元に敗れ討死しました。

在氏や木沢浮泛、木沢中務大輔・左馬允兄弟も、この戦いに巻き込まれ、飯盛城への籠城を余儀なくされます。結局、天文十二年(1543)に飯盛城は開城し、何れも退去して牢人となりました。

十か月近い籠城を耐え抜いた飯盛城で、木沢左馬允が整備した痕跡を示すのが、『美濃加納永井家史料』「河内国飯盛旧城絵図」に見える「左馬允曲輪」です。左馬允が又四郎から改称した時期から考えて、天文八年(1539)後半から天文十年(1541)頃に整備されたと推測されます。

### 3 安見宗房

畠山在氏や木沢左馬允らが退去した後、飯盛城主となったのが安見宗房です。安見氏は交野郡私部郷（交野市）周辺を基盤とし、枚方寺内町にも宿所を持つ中小領主でした。また、宗房は大和の越智氏の被官でしたが、交野郡と隣接する大和の添下郡鷹山荘（奈良県生駒市）の鷹山弘頼と行動を共にしています。越智氏も鷹山氏も、応仁の乱の際には畠山義就を支援していました。木沢長政が仕えた畠山義堯・在氏兄弟も畠山義就の子孫に当たることから、木沢氏・安見氏・鷹山氏の間には、義就やその子孫に仕える被官のネットワークが、半世紀近くも存在していたようです。

宗房と鷹山弘頼は、山城南部の諸侍たちが結んだ一揆の盟主的地位にあり、守護代に任命するよう望むなど、木沢長政の基盤を引き継いでいきます。そして、高屋城の遊佐長教陣営に加わりました。遊佐長教は、弟を紀伊の根来寺に送り込み、杉坊明算と名乗らせると、摂津や四国を押さえる三好長慶や大和の筒井順昭を養女の婿に迎え、南近畿を治める一大勢力でした。

しかし、遊佐長教は天文二十年（1551）に暗殺されます。河内では、浄土真宗の萱振寺内町（八尾市）を拠点として富貴を誇り、上郡代に登用され高屋城に在城した萱振賢継と、下郡代として飯盛城の城主となった安見宗房との間で激しい対立が起きました。当初、三好長慶が仲裁して、宗房の息子と萱振賢継の娘が結婚することで和睦しましたが、天文二十一年（1552）に宗房は賢継を飯盛城に招いて謀殺しました。天文二十二年（1553）には、鷹山弘頼も宗房によって自害させられます。

宗房は萱振賢継を討つため、飯盛城に「スキ（数奇）ノ座敷」を設けて、様々な引出物を用意し、芸能などをさせて、酒宴を催しました。数奇は風流、特に茶湯を指します。宗房は、数々の名物茶器や墨跡などを所持する文化人でもありました。また、宗房は後に狭山池の改修に着手しており、飯盛城を改修できる動員力や技術力を持っていたことをうかがわせます。

河内での権力基盤を確立した宗房は、弘治二年（1556）に大和へ攻め入り、畠山在氏の子の尚誠や鷹山氏などと戦っています。弘治三年（1557）には被官らに追放された筒井順昭の子の順慶が、宗房を頼って飯盛城に逃れました。宗房は弘治四年（1558）に順慶を後見して出兵し、大和も勢力下に収めます。このため、遊佐長教の死後に高屋城主となった畠山高政と対立し、永禄元年（1558）には、高政が出奔する騒動となりました。

畠山高政は三好長慶の力を借り、永禄二年（1559）に河内に復帰しますが、既に宗房なくしては河内の支配は成り立たない状況でしたので、高政は長慶に無断で宗房と和睦します。これに激怒した長慶は、宗房や畠山高政を追放し、河内と大和を直接治めることにしました。

宗房はその後、畠山高政・秋高兄弟を支え、上杉謙信との交渉などで腕を振るい、守護代の「遊佐」に名字を改めるなど家格を上昇させました。将軍足利義昭の時期には、その直臣である奉公衆に登用されています。

## 4 三好長慶

三好氏は阿波の三好郡を拠点とする領主で、阿波北西部の守護代を務めたり、京都で守護の細川氏に仕えたりしていました。ところが、細川一族の本家である管領家の跡目争いに巻き込まれていきます。三好元長は細川晴元に仕え、宿敵の細川高国を討つ武功を立てましたが、晴元の寵臣の木沢長政と対立し、自害に追い込まれました。このため、三好元長の子の長慶は遊佐長教と同盟し、天文十八年（1549）に江口（大阪市東淀川区）の戦いで、晴元を打ち破ります。

その後、長慶は、細川晴元に味方する將軍足利義輝あしかがよしてると戦うことになりました。長慶は和睦を望みましたが、義輝は度々和睦を破り、暗殺を企てたため、天文二十二年（1553）に近江へ追放します。その結果、長慶は戦国時代で初めて、足利將軍家の者を擁立せず、単独で首都京都を支配することになりました。後奈良天皇ごならてんのうは長慶を義輝と同じ従四位下に叙任し、公認しました。長慶も義輝に代わって、京都の「静謐」を守ることを宣言します。そして、倭寇わこうの取り締まりを求める中国皇帝の使者や、正親町天皇おおぎまちてんのうの踐祚せんそに伴う改元への対応など、將軍の専権事項を次々と代行しました。その結果、足利義輝は正親町天皇より永祿改元すら通知されず、無視されたため、天皇に背いて古い弘治年号を使い続けます。

戦国時代では、西国の大内義興おおうちよしおきや、東国の北条氏康ほうじょうじやす、上杉謙信も足利將軍家の者を推戴することが常識でした。織田信長も足利義昭・義尋親子を推戴します。そうした中で、長慶の行動は極めて画期的なものでした。特に上杉謙信いっしきよしたつ・一色義龍いちしきよなり・織田信長・毛利元就などは、国を奪ったばかりで権力基盤が安定しておらず、將軍の公認を欲していたのに、幕府そのものが無くなるのではないかという危機感を抱き、足利義輝を支持しました。このため、永祿元年（1558）に長慶は義輝と和睦します。

永祿三年（1560）三好氏は河内・大和・丹後・若狭へ侵攻し、その影響は伊勢や伊賀にも及びました。長慶は飯盛城に入ると、三好氏の祖先の新羅しんら三郎源義光ぶろうみなものよしみつが元服した園城寺おんじょうじの新羅社しんらしゃを勧請するための作法や経費について、神道家の吉田兼右よしだかねみぎに問い合わせています。長慶は祖霊を祀ることで、飯盛城を聖地にしようとしたのです。細川氏が築城した芥川城（高槻市）や畠山氏歴代の居城となった高屋城は、細川・畠山両管領家の分国を合わせて支配するようになった長慶の地位を示すにはふさわしくないと考えたのでしょうか。それに対して、飯盛城は木沢長政や安見宗房以来、河内・大和・山城南部の紐帯でしたし、「御屋形様」の居城という由緒もありました。長慶は芥川城を嫡男の三好義興みよしよしおきに譲り、高屋城に長弟の三好実休みよしじつきゅうを入れ、彼らに君臨する大御所として飯盛城を居城としたのです。

永祿四年（1561）、長慶はかつて天皇家の家紋であった桐御紋を免許され、將軍家並の家格を得ます。同年には飯盛千句が催されますが、その後も度々飯盛城で連歌が開催されました。それは長慶が愛好していたからだけではなく、強い政治性を帯びていました。飯盛千句では、谷宗養たにそうようや里村紹巴さとむらじょうはといった連歌師だけでなく、堺商人せんりきゆうで千利休の師匠でもある辻玄哉つじげんさい、兵庫津の豪商たるい榎井氏くおんじかいぎよくを檀那とする久遠寺快玉あたぎふゆやす、長慶の次弟の安宅冬康などが参

加し、山城の石清水と氷室山、大和の春日野と初瀬、河内の天野川と交野、摂津の五月山と堀江、和泉の信太と深日といった名所を詠み込み、長慶が五畿内、つまり当時「天下」と呼ばれた日本の首都圏を手中にしたことを言祝いでいます。

永禄五年（1562）、反撃に転じた畠山高政や安見宗房、根来寺は長慶の飯盛城を囲みます。しかし、三好義興がその背後を突いて挟撃した結果、教興寺きょうこうじ（八尾市）の戦いで大勝利を得ました。この戦いでは、足利義輝の叔父や直臣が長慶に敵対したため、両者の関係は急速に悪化します。長慶は義輝より娘を人質に取ったり、再び將軍の専権事項を代行したりしたため、緊張が高まりました。

また、同じ飯盛城主ですが、木沢長政や安見宗房は大和や山城南部への拡大を図ったのに対して、長慶は深野池を中心に渡辺津（大阪市中央区）などとの水運の掌握を志向します。河内北部から摂津南部（大阪市）にかけては、深野池や新開池をはじめ、淀川水系や大和川水系によって形成された内海世界が広がっていました。この地域には三好元長が河内八箇所（大東市、門真市、大阪市鶴見区）、長慶が河内十七箇所（寝屋川市、門真市、守口市、大阪市鶴見区）、三好宗三が榎並荘（大阪市城東区）と三好一族が着々と基盤を築いてきました。

そこで、長慶・義興親子は故実いせさだすけに詳しく文書作成を担当した伊勢貞助や、河内の内海と外海である大阪湾の境界である渡辺津に拠点さんを置く渡辺氏らに、この地域で領地を与えます。この際、「野崎惣中のざきそうちゆう」という村落共同体に検地帳を差し出すよう命じており、一石単位まで土地を把握していたことがわかります。

また、深野池の漁民や船を編成していた三箇頼照さんがよりてるは進んで、長慶に従ったようです。飯盛城の山上の城内に屋敷を立て、移り住みました。そのため、長慶が宣教師に布教を許可した際、改宗して洗礼名サンチョを名乗ります。『美濃加納永井家史料』「河内国飯盛旧城絵図」にも「三ヶ殿曲輪」として、その痕跡が残されています。

## 5 三好義継

永禄七年（1564）に三好長慶が飯盛城で死去すると、その死は秘匿されました。嫡男の三好義興は前年に没していたため、長慶の三弟そごうかずまさ十河一存みよしよしつぐの子の三好義継が後継者となります。

義継は永禄八年（1565）に対立が先鋭化していた將軍足利義輝を討ちました。伯父の三好長慶や、後に足利義昭を追放した織田信長と比べると究極の下剋上です。既に將軍家並みの家格を得た三好氏を継ぎ、養女とはいえ摂関家の九条家出身の母を持つ貴公子の義継が、自ら將軍になるため計画したのでしょう。正親町天皇は足利將軍家の象徴で重代の家宝である「御小袖」の鎧を収めた「唐櫃」を下賜するなど、義継を次の將軍として認めるつもりでした。

しかし、畠山秋高・上杉謙信・朝倉義景あさくらよしかげ・織田信長はそれに異議を唱え、足利家の再興に向け結集します。また、義継は長慶が遺した被官たちをまとめきれず、分裂を招きまし

た。三好長逸・三好宗渭・石成友通（後の三好三人衆）は飯盛城を襲うと、義継の側近を斬って、松永久秀の排除を迫るだけでなく、義継の身柄を高屋城に移してしまいました。

失脚した松永久秀は足利義昭や織田信長、永禄十年（1567）には三好義継と結びます。このため、飯盛城を守る松山守勝は義継・久秀方に寝返り、久秀も援軍を派遣しましたが、三好三人衆に奪還されました。

永禄十一年（1568）に足利義昭や織田信長らが三好三人衆の本拠地である芥川城を攻略すると、義継も飯盛城に復帰します。この時、義継は河内北部から摂津南部を支配することになりました。そのためか、永禄十二年（1569）から翌年九月頃までに、飯盛城から平城の若江城（東大阪市）に移っています。この頃、足利義昭から摂津を与えられた和田惟政も山城の芥川城から平城の高槻城（高槻市）に移りました。義昭の居城の二条城も平城です。義昭の政策として、畿内の城郭は山城から「天主」を持つ平城へと展開していきます。

そうした義昭幕府は、三好三人衆・本願寺顕如・朝倉義景の包囲網に苦しみ、和睦を求めたことで、元亀元年（1570）に三好三人衆と四国衆が若江城に参会し、五年ぶりに全ての三好氏勢力が、義継の下に結集する状況になりました。翌年、義継は義昭幕府から離脱し、大阪平野や奈良盆地を勢力下に収め、京都をうかがいます。元亀四年（1573）には、足利義昭は信長を見捨て、三好義継・朝倉義景・武田信玄らと結びました。ところが、三好長逸・武田信玄らの死が相次ぎ、信長は攻勢に転じます。義昭は追放され、義継は若江城で自害しました。

## おわりに

首都京都の流通を支える淀川左岸の河内北部や摂津南部は、畠山氏・細川氏・足利將軍の諸勢力が混在し、安定的な支配が難しい地域でした。それゆえ、新興勢力が割拠します。その象徴が浄土真宗本願寺の大坂寺内町と、幕府に従わず、河内を占領した畠山義就の被官を出自とする木沢長政の飯盛城でした。

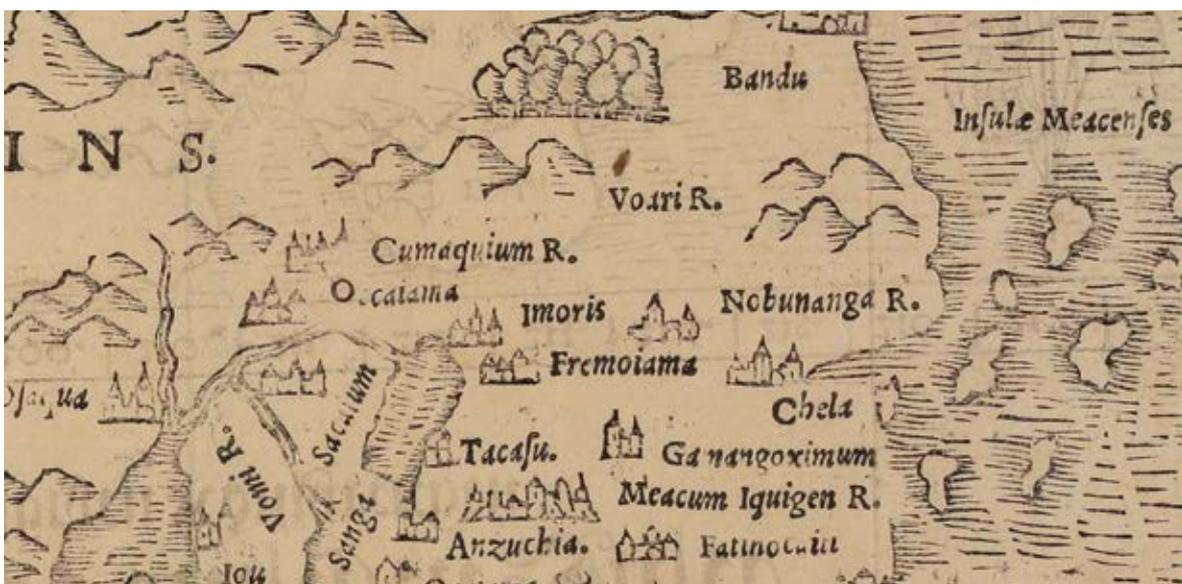
木沢長政や安見宗房は主筋の畠山氏を乗り越え、河内を中心に山城南部や大和との統合を進めていきます。それに対して、足利將軍家を擁しない政権を打ち立てた三好長慶は、飯盛城西麓に広がる河内の内海世界を掌握しました。長慶は父の元長を弔う南宗寺を建立した堺を経済的拠点とし、三好氏の祖霊の勧請を計画した飯盛城を政治的拠点にするなど、京都盆地より大阪平野の掌握を目指します。長慶は河内と大和を併呑すると、桐御紋の免許など將軍家並の家格を獲得し、その権力と権威を高めます。そして、足利義輝から人質を取って、改元の執奏など將軍の専権事項を行います。飯盛城の整備も、こうした三好対足利の対抗関係を背景に考える必要があるでしょう。

三好義継は義輝を討ち、將軍に代わることを正親町天皇より認められました。しかし、長慶の遺臣を統率できず、足利義昭の上洛を招いてしまいます。義継は巨大山城である飯盛城を維持する力を失い、飯盛城の歴史は終わります。

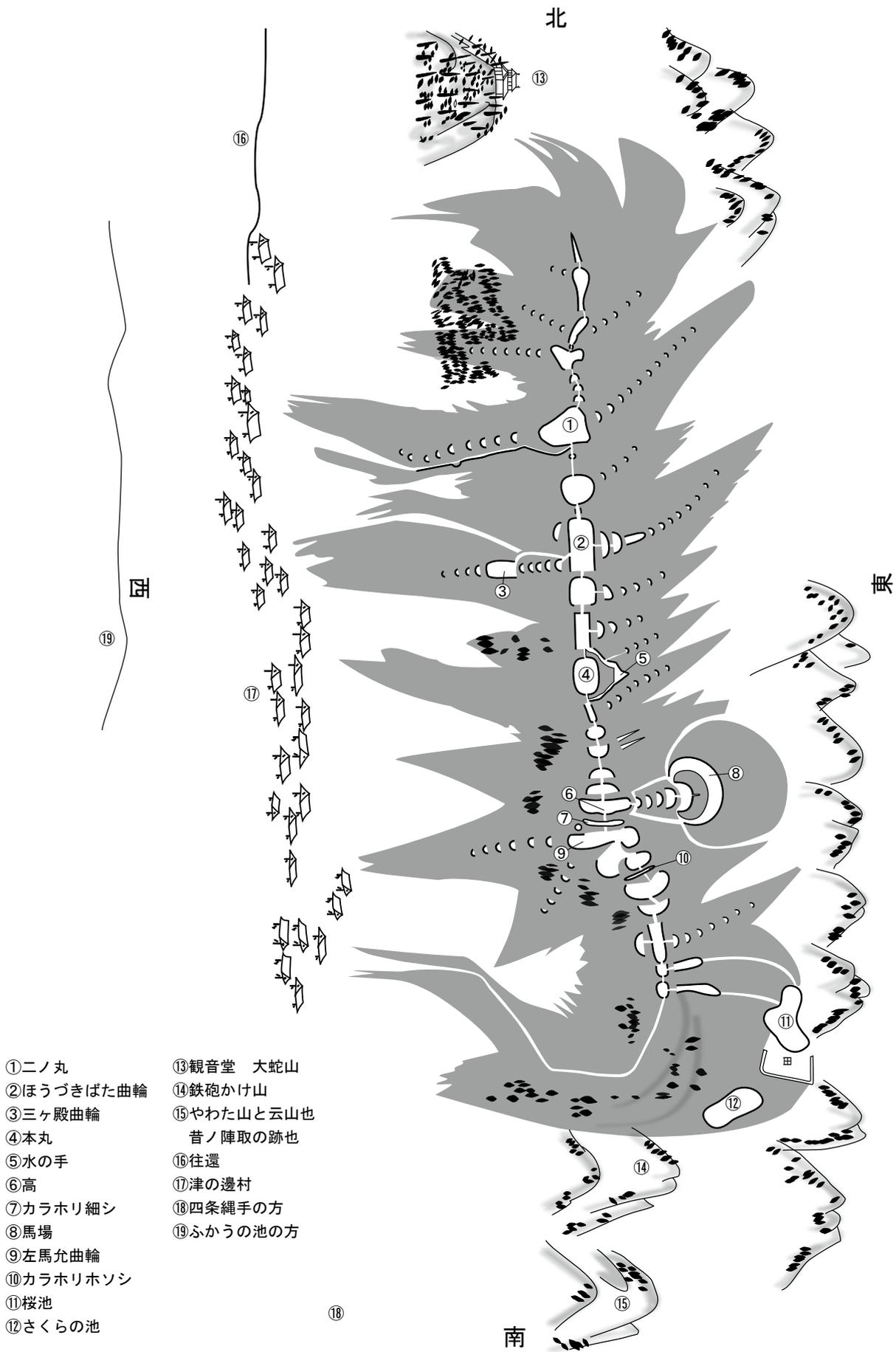
飯盛城は、畿内の諸勢力の一元的支配が困難な河内の内海世界の最奥に位置した象徴でした。それ故に新興の武家権力の基盤となり、彼らは室町社会の秩序に挑み、下剋上を推し進めていきます。その結果、在京せず京都を支配した飯盛城の政治的機能と、大坂寺内町や堺の経済的機能は、この地域を一元的に支配し、足利将軍家を終わらせ、下剋上を完成させた豊臣政権の大坂城下町に統合されることになったのです。



キサトウス 日本諸島実記 日本図（天理大学附属天理図書館所蔵）



「日本図」部分（中央の "Imoris" は飯盛城を指す）



- ①二ノ丸
- ②ほうづきばた曲輪
- ③三ヶ殿曲輪
- ④本丸
- ⑤水の手
- ⑥高
- ⑦カラホリ細シ
- ⑧馬場
- ⑨左馬允曲輪
- ⑩カラホリホソシ
- ⑪桜池
- ⑫さくらの池
- ⑬観音堂 大蛇山
- ⑭鉄砲かけ山
- ⑮やわた山と云山也  
昔ノ陣取の跡也
- ⑯往還
- ⑰津の邊村
- ⑱四条繩手の方
- ⑲ふかうの池の方

「河内国飯盛旧城絵図」

## 飯盛城の歴史的位置 —「天下」の首都—

仁木 宏 (大阪公立大学教授)

### 戦国時代の新しいイメージ

戦国時代は、おおよそ15世紀なかば過ぎにはじまり、1580年代、豊臣秀吉による天下統一が完成したころに終了したといえるでしょう。「戦国」という言葉に表現されているように、日本の国家体制が戦争によって動揺し、室町幕府が滅んだり、各地の戦国大名が盛衰をとげたりしたことは、知られているとおりです。

ただ、このように政治体制や政治的な規範が乱れたことをもって、「世の中」すべてが無秩序になり、戦争が日常化することで、社会全体が衰弱してゆくという、マイナス・イメージをもつことは全くの誤りです。この時代は、各地に都市が誕生し、また従来からある都市の多くは大きく発展しました。大名や武士が経営する城下町はまだまだ有力ではありませんでしたが、寺社を中心とする宗教都市、水路・陸路の結節点に発達した港町や宿場町が原動力となって、都市が広範に展開してゆきました。

都市の発展は、そうした都市での商売や生産の活性化と結びついています。それは、都市間の取引の発展、他の都市や他地域をむすぶ流通の強化と連動していました。物や人、情報や思想の流通も、前代より活発になってゆきました。つまり、15世紀なかば以降の時代、列島では、未曾有の発展の時代を迎えていたのです。そのうねりは、1580年代を越えて、17世紀までつづきました。つまり、「政治」を基準とする「戦国時代」は天下統一で終了しますが、都市・流通・経済の発展は、武家の再統合、徳川幕府の成立を経てつづくのです。

では、こうした都市・流通・経済が、列島社会において15世紀以降、発展した原因はどこにあるのでしょうか。主たる要因は、東アジア海域世界における物流・人流の活性化です。当時、石見<sup>いわみぎんざん</sup>銀山（島根県大田市）から産出されて精錬された銀は、世界的水準からみて安価であったため、その買い付けのため中国船が日本に殺到し、ポルトガルをはじめ西欧の国々からも注目をあつめました。キリスト教や鉄砲が日本に伝わったのはこうした地球規模の物の動きの一環でした。その他、「唐物」（からもの）とよばれる中国製の陶磁器や手工業品、書籍・経典、銭貨などが流入しました。

このころは、国家という概念はゆるく、ボーダーレスに日本、朝鮮、中国、琉球を行き来する人がたくさんいました。民族をこえた婚姻関係や交易組織も一般的であったと考えられています。

こうした東アジア海域世界に直接、かかわりをもったのは、南九州、西九州の沿岸部の武士団や港町に限られますが、交流・取引の爆発的な活発化の影響は、広く西日本全域におよびました。15世紀後半から16世紀になるころには、瀬戸内海、日本海西部（山陰沿岸）、南九州から土佐・阿波を経る航路などの流通量が増加したことが想定されます。中国・朝鮮・琉球などからの貿易品だけでなく、九州・四国・中国地方の産品が主にこうした海路をつう

じて大阪湾や若狭湾に流入し、そこから首都京都にもたらされたのです。

京都や畿内から逆に、文化や宗教が西国に流れ込むことも見られます。「戦国仏教」とよばれ、当時、全国的に教線を広げていた浄土真宗（一向宗）や日蓮宗（法華宗）が西日本の港町に寺院・道場を設け、周辺の人々に布教を強めていました。

都市・流通・経済が発達した最大の要因は、こうした国内・国際の交易・流通の活性化にあります。「国境線」（勢力圏）をめぐるつばぜり合いに血眼の戦国大名とは関係なく、商人や流通業者はボーダーレスの活動を強めていたわけです。

なお、こうした国際的な契機とは別に、近畿地方を中心とする村落において、農民たちが豊かになることで、商業や経済に関与する度合いが高まったことも都市・流通の活性化に寄与しました。農民や漁民などの民衆が生活に余裕を得、生産物を市場に供出できるようになる。一方で、市場で奢侈品を購入できるようになる。そういう循環が生まれないと交易や流通の発展は望めません。

つまり、「戦国時代」というのは、一般に考えられているように、社会全体が停滞し、民衆が疲弊していた時代ではありません。武士たち、大名たちは凄惨な戦いを繰り返し、その余波で焼かれた村や都市も少なくなかったでしょうが、それを社会全体の基調であったと見なすことは、私は誤りだと考えています。

大名たちの戦いとは別に、発展し、繁栄する都市や村、活性化する交易や流通。そうした社会のあり方を基本的な動向とみるべきでしょう。

## 大阪湾岸・大阪平野の発展

戦国時代は、列島各地が経済成長の初期段階にありましたが、なかでも京都から大阪平野、大阪湾にかけての発展性が顕著でした。

朝廷や幕府が立地する首都京都には、多くの人々が住み、戦国時代においても交易や産業の圧倒的な拠点でした。そのため国内・国外の産品・輸入品の大半は京都をめざして集まってきました。大阪湾や山陽道を東上してきた物資は、かならず大阪平野を通過します。つまり大阪平野は首都京都の西の「受け口」だったのです。

大阪湾内でかつて中心的な港であったのは兵庫津です。兵庫津からは山陽道が延びて、西宮から伊丹市域・池田市域をとおり、千里丘陵をこえて茨木市域、芥川宿（高槻市）から大山崎にいたります。さらに久我縄手・西国街道などをおって京都にいたりました。

しかし、戦国時代には、兵庫よりも堺のほうが繁栄するようになっていました。堺には主要な陸路があつまっていました。湾岸ルートとしては、渡辺津や大坂（寺内町）から天王寺・住吉（以上、大阪市）を経て堺にいたる街道（熊野街道）の交通量はかなり多かったようです。堺からは、海岸沿いの紀州街道、内陸寄りの熊野街道が和泉の港町や村々を結びました。

堺から東へは長尾街道・竹内街道がのびていました。南河内の村々をぬけ、国府・古市（柏原市・羽曳野市付近）を経て、大和国にいたります。飯盛・生駒・信貴から二上山の西麓を貫通するのが東高野街道です。長尾街道・竹内街道と東高野街道は国府・古市のあたり

で交差します。ここから南へ向かえば、河内長野から紀伊国にいたります。一方、北に向かえば、飯盛山の西麓を経て、洞ヶ峠をへて山城国八幡に着きます。ここからは水路・陸路で淀・伏見などをへて京都にいたることになります。

このように堺は、京都をはじめ近畿地方各都市への陸路の起点であったために港町として発展し、国際貿易港として繁栄しました。

この他に、大阪湾内では、尼崎も繁栄する港町でした。尼崎は、猪名川と神崎川の河口部に位置することから、海船と川船の中継地として発展しました。また背後に広がる摂津国西部の村々の交易・流通拠点でもありました。

さらに、寺内町大坂も、淀川・大和川河口近くに位置する港町でした。戦国時代、川の流れや活用方法は現代とはかなり異なりました。淀川については、山城国淀（京都市伏見区）の川船組織が独占的な力をもっていたようです。一方、大和川は、現在のように堺方面には流れておらず、中河内を数本の流れに分かれながら流下していました。北河内と中河内の境付近には、新開池・深野池も存在しました。淀川の淀のように、独占的な業者は存在せず、寺内町大坂と北・中河内の村々を結ぶ中小の船が流通を担っていたと推定されます。

このように、戦国時代の大阪平野では、陸路・水路が網の目のように発達し、モノや人、情報を迅速に運ぶ社会的な体制が整っていました。

内陸部の都市としては、摂津国では伊丹氏の伊丹、池田氏の池田。河内国では、守護畠山氏の影響下にある若江（東大阪市）、古市、和泉国岸和田などが城下町として発展しました。これらはいずれも西国街道や紀州街道など、主要街道上やその近傍に立地しました。これとは別に、街道上では、郡山（茨木市）・芥川など（いずれも西国街道）の宿が発達しました。

さらに、大阪平野の特色は、数多くの寺内町が族生したことです。中心に位置する大坂を「扇の要」にして、塚口（尼崎市）、富田（高槻市）、出口（枚方市）、枚方、久宝寺（八尾市）、富田林、貝塚などが広く分布しました。これらはいずれも、淀川や大和川、西国街道や紀州街道などに隣接しています。

以上に見てきたように、戦国時代の大阪平野では、陸路・水路が発達するとともに、交易・産業の拠点であった都市が無数に展開していました。

戦国時代の大阪平野といえば、両畠山氏の抗争、細川両派の抗争、三好氏と反三好派の戦闘など、戦争がずっとつづいていたような印象がありますが、そうした見方は一面的であり、都市や流通の隆盛によってこの時代のこの地域は説明される必要があるでしょう。事実、以上にあげたような都市のほとんどは、現在、大阪府内の自治体になっています。つまり戦国時代の都市として発生したさまざまな都市が、その後、近世・近代を経て、現代の大阪の発展につながっているのです。

こうした展開の基盤には、大阪湾に流入した国内・国外の物資が京都へ移送される、そのルート上に大阪平野の交通路や都市が位置したことがあります。つまり、当該期の列島をとりまく経済発展がこの地域に集約的に表現されたのです。

このことは、同じく首都京都に隣接し、大阪平野と対称的な場所（東の「受け口」）に立

地する近江国と比較して見てみればよくわかります。戦国時代の近江国でも、琵琶湖の港町である坂本（大津市）や大津、今津（高島市）・塩津（長浜市）などが都市としてある程度発達していたことがわかっています。しかし、それらは大阪湾岸の港町とはかなり格差がありました。内陸部の都市の発達は限定的です。近江にも寺内町はいくつかありましたが、摂津国富田や河内国久宝寺などに比べるとかなり小さかったようです。

つまり、大阪平野がうけとめた西から、大阪湾側からの流入量が、近江がうけとめた北や東からの流入量よりずっと多かったことがわかるでしょう。

戦国時代の大阪平野は、京都を中心核とする山城国とも比肩し、凌駕しつつありました。京都盆地では、首都京都はもちろん全国随一の都市でした。それ以外に、大山崎、淀、八幡など、大阪平野と水陸で結ばれる都市は発展を遂げていました。他では、宇治、寺内町山科（京都市山科区）など、京都の郊外都市の発達は確認できますが、必ずしもその数は多くありません。この他では木津（木津川市）くらいでしょう（木津はむしろ大和国奈良の郊外都市です）。

すなわち、上方の中心地は、戦国時代を経るなかで京都から大阪へ徐々に遷移しつつあったと私は考えています。これが、のちに羽柴（<sup>はしば</sup>豊臣<sup>とよとみ</sup>）秀吉<sup>ひでよし</sup>が、本拠を大坂に設定し、江戸時代になると大坂がいわゆる「天下の台所」になってゆく前兆でした。長い時代をかけての歴史の流れ、経済・流通における地政上の変容がここに認められるでしょう。

### 三好政権の位置づけと「首都」

以上のような、戦国時代の社会の特徴を活用し、「天下人」にのぼりつめたのが三好長慶<sup>みよしながよし</sup>でした。

三好氏は、もともと阿波国が本国でした。そこで細川家や足利将軍家とつながりを持ち、近畿地方へ進出してきました。最初の拠点<sup>こしみずじょう</sup>は、西宮にほど近い越水城でした。戦国時代の西宮は、大阪湾に面した港町であると同時に、西国街道を扼する要衝の地でした。

三好氏はまた堺にも拠点をもっていたようです。堺は自由都市であるとして、織田信長<sup>おだのぶなが</sup>に屈服するまでは武家が立ちいることができない空間であるかのような誤解がありますが、事実ではありません。もともと細川管領家や細川和泉国守護家が関与していました。三好氏は、当時、堺で発展しつつあった日蓮宗と結びつくことで、堺に浸透していったようです。

三好氏はさらに、淡路島から紀伊水道に影響力をもつ水軍である安宅氏<sup>あたぎ</sup>も組みこんでゆきます。こうして阿波、淡路島から大阪湾に進出し、西宮や堺にも勢力をのばした三好氏は、長慶<sup>あくとがわじょう</sup>の代に芥川城を得ます。芥川城は、摂津国の東の要衝であるとともに、細川管領家にゆかりの深い城でした。

かつて芥川城は、阪急高槻市駅にもほど近い芥川宿の近くにあったと考えられていましたが、近年は、城郭は最初から山城（やまじろ）であったと同定されるようになっていきます。ただ、私自身は、細川氏やのちの三好氏にゆかりの寺院や拠点が、西国街道沿いの芥川宿の近辺にあったことを重視すべきであると考えています。芥川城は、やはり西国街道を扼し、

そこに直接アクセスできることに意味があったでしょう。

この芥川城と、長慶が次に拠点とする飯盛城はかなり似ているといえるでしょう。飯盛城の場合は、芥川宿にあたる街道沿いの拠点がより不明確ですが、東高野街道周辺に位置するいくつかの集落が「城下」の機能をはたしたものと推定できます。東高野街道は、北に進めば八幡・淀から京都へ。南へ進めば国府・古市あたりを経て堺へつながっています。

さらに、飯盛城の場合は、大和川水系へのアクセスにすぐれています。三箇城の三箇氏<sup>さんがじょう</sup>が三好氏の有力家臣であったことはキリシタン史料から確認されていますが、三箇に限らず、いくつかの川港が飯盛城の西麓に成立していたでしょう。ここからは川筋を経て、寺内町大坂から大阪湾に直接結びついていました。

ところで、芥川城も飯盛城も、以上に紹介してきたように小規模な「城下」集落をもつものの、「城下町」とよべるほどの都市を形成していませんでした。一般に、戦国大名であれば、多くの商工業者を集住させる大きな城下町を形成するのが一般的であり、そこに大名の権力があらわれていると考えられていました。しかし、戦国大名が商工業者を城下町に集めるのは何故でしょう。それは、彼らを城下町に集めることで、特権を与えるなどして育成してあげる。大名が育成しないと成長しえなかったからだと考えられます。

しかし、大阪平野についていえば、先に詳細に述べたように、堺をはじめ、圧倒的多数の都市が勃興しており、多数の商人や運輸業者がある意味、大名権力とは関係なく活発に活動していました。彼らは戦乱や、それにとまなう大名の退転にかかわらず動き回っています。つまりこうした商人や運輸業者、手工業者を活用すればよいわけで、彼らをわざわざ城下町に集めて育成する必要はなかったわけです。

これが、芥川城や飯盛城に顕著な城下町がなかった理由でしょう。こうした意味でも、三好長慶は、戦国時代の社会の特徴、大阪平野が生み出した「果実」をたくみに採り入れたといえます。

この他、飯盛城は、北の京都から西の大阪平野、遠くは大阪湾から淡路島、阿波国まで眺望できる点が、三好政権に適合的であったこと。単なる軍事拠点であるだけでなく、キリシタンの大規模な洗礼がおこなわれたり、連歌会などが催されたりすることからわかるように文化・思想の核であったこと。さらに、山の上で訴訟の裁定がなされることから、権力の公平性、平和の実現のシンボルであったことなど、「首都」として多彩な性格を発揮していました。

こうした飯盛（城）のあり方は、幕府がおかれていた京都、のちの織田信長の安土<sup>あづち</sup>、豊臣秀吉の大坂にも通底するものがあります。

従来は、京都の次は大坂。あるいは、京都（幕府）→安土（信長）→大坂（秀吉）といった「首都」、あるいは「天下人」の拠点の推移の説明がなされてきました。しかし、本論の趣旨からいえば、京都→（芥川・）飯盛→安土→大坂とする、新たな拠点論、「首都」論を論じることの重要性を理解いただけるのではないのでしょうか。

## 飯盛城跡の歴史的価値

測量調査と分布調査で明らかになった飯盛城跡の城域は（東西 400 m、南北 700 m）西日本有数の規模を誇ります。また、以前より指摘されていたように北エリアは防御空間、南エリアは居住空間として機能していたことが調査成果からも想定されます。多くの曲輪の周囲には石垣が築かれており、石垣は城の全域に分布していることも明らかになりました。

石垣については飯盛城跡を特徴づける遺構であり、戦国時代末期の石垣構築技術や年代を特定できる貴重な事例であるといえます。発掘調査では、礎石が出土し瓦が発見されたことから石垣・礎石建物・瓦を導入した城郭であることが分かりました。調査成果から飯盛城跡の歴史的価値は以下の4点にまとめることができます。

- ・戦国時代末期の重要な政治拠点・文化交流の場として機能したこと
- ・戦国時代末期の城郭遺構が良好に残存し、城の機能が推定できること
- ・戦国時代末期の山城における石垣の仕様と構築技術を示す貴重な事例であること
- ・石垣・礎石建物・瓦を導入した城郭であること

飯盛城跡は織田信長によって完成される「織豊系城郭」に先行して石垣・礎石建物・瓦の3つの要素を取り入れた稀有な事例であり、城郭史上の画期に位置づけられる戦国時代末期の時代の変化を考察する上で、重要な遺跡といえます。

## 今後の課題と保存・活用の展望

飯盛城跡は飯盛山のハイキングコースの一部に組み込まれています。休日は府内外からも多くのハイカーが訪れ、国史跡指定後には城跡を見学する方も増加しています。

遺構の保存では石垣が崩れていたり、人の往来の増加により遺構面が傷んでいる箇所が散見されます。遺跡を見学するにあたり、立地が山ということもあり遺構の保全と見学者の安全確保に努める必要があります。

史跡の活用では、ハイキングコース沿いには飯盛城跡の関連遺跡である龍間城跡や野崎城跡、その他の遺跡も立地しており、飯盛山とその周辺の自然環境が一体となった遺跡の保存・活用方法を検討していく必要があります。



四條畷学園校舎屋上から飯盛山を望む

## 【参考文献】

- 中井均 1981「飯盛山城」『日本城郭大系』12巻 大阪・兵庫 新人物往来社
- 小野正敏・五味文彦・萩原三雄 編 2011『中世人のたからもの』高志書院
- 仁木宏、中井均、中西裕樹、NPO 法人摂河泉地域文化研究所編 2015『飯盛山城と三好長慶』戎光祥出版
- 天野忠幸・高橋恵著 2016『三好長慶、河内飯盛城より天下を制す』風媒社
- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020『飯盛城跡総合調査報告書』
- 中世学研究所 編 2020『城と聖地』高志書院
- 實盛良彦 2021「飯盛城跡出土の台付皿と「御体塚」」『中世土器研究』141号 中世土器研究会
- 高槻市 2021『芥川城跡 -総合調査報告書-』

## 飯盛城関連年表

- 1530(享禄3)頃 細川晴元被官・木沢長政、飯盛城を居城とする。
- 1531・32(享禄4・5) 畠山義堯、木沢長政の飯盛城を攻撃。
- 1536(天文5) 木沢長政、飯盛城から信貴山城(奈良県平群町)にうつる。
- 1537(天文6) 木沢長政、畠山在氏を河内守護に擁立。飯盛城は守護所となる。
- 1542(天文11) 木沢長政、遊佐・三好・本願寺と戦い、太平寺(柏原市)で敗死。ついで両軍が飯盛山麓で衝突。
- 1543(天文12) 木沢の残党、飯盛城から大和方面に退く。
- 1551(天文20) 安見宗房、河内下郡代となり飯盛城に入城。
- 1552(天文21) 安見宗房、飯盛城内で酒宴にことよせて萱振賢継を誅殺。
- 1559(永禄2) 安見宗房、高屋城に進出するが、長慶に攻められ飯盛城に退却。
- 1560(永禄3) 三好長慶、高屋城(羽曳野市)の畠山高政を破り、安見宗房を追放して河内を占領。芥川城(高槻市)から飯盛城に入る。
- 1561(永禄4) 三好長慶、飯盛城で連歌会(飯盛千句)を催す。
- 1562(永禄5) 三好長慶、飯盛城で安見宗房や根来寺衆を迎え撃つ。
- 1564(永禄7) 宣教師ガスパル・ヴィレラや日本人修道士ロレンソ了斎、飯盛城で三好長慶の家臣73名を洗礼。  
三好長慶、飯盛城で弟の安宅冬康を殺害。  
三好長慶、飯盛城で死去。養子の義継が家督を継ぐ。
- 1565(永禄8) 宣教師ルイス・フロイス、飯盛城を来訪。  
三好義継、飯盛城から高屋城にうつる。
- 1567(永禄10) 飯盛城、三好義継に対抗する三好三人衆の手にわたる。
- 1568(永禄11) 三好義継、將軍足利義昭から飯盛城を安堵される。
- 1569(永禄12) 三好義継、飯盛城から若江城(東大阪市)にうつり、飯盛城城郭としての機能を失う。

## ■用語解説

くるわ  
**曲輪**城郭における基本的な居場所。多くの場合内部を平坦化して、周囲に対しては防御施設によって守る

おびぐるわ こしぐるわ  
**帯曲輪・腰曲輪**：この2つの言葉は厳密な意味での使い分けはないが、基本的に曲輪斜面にこれを囲うように長く設けられたものを帯曲輪、短くポイントに設置されたものを腰曲輪という

るいせん  
**塁線**：土塁・切岸・石垣によって城域を遮断するライン

きりぎし  
**切岸**：曲輪斜面を防御するために人工的に加工を施した斜面

どるい  
**土塁**：曲輪の縁辺部に土盛をして防御壁とした施設

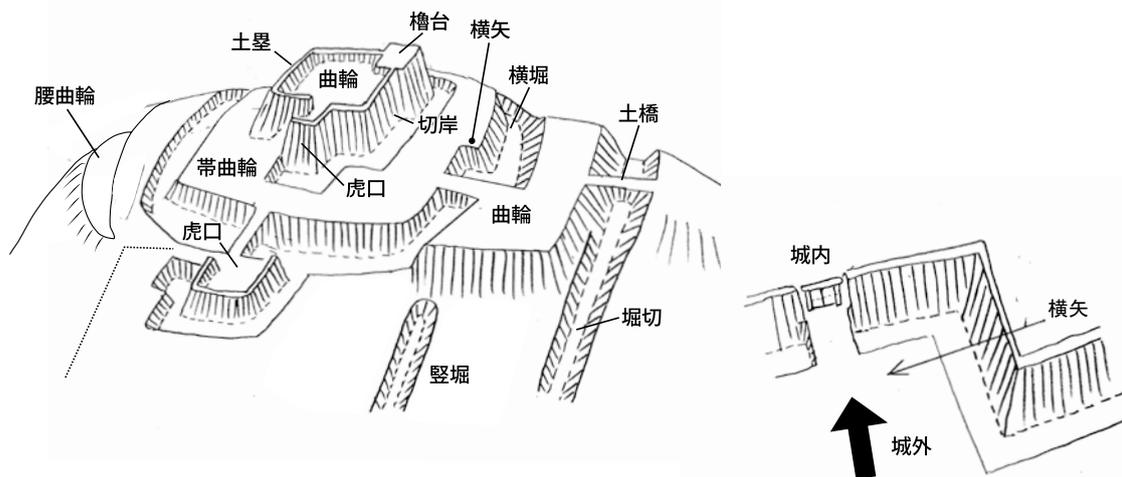
ほりきり  
**掘切**：尾根筋を分断する堀を言う。山の弱点となる尾根伝いに侵入する敵を防ぐために設けたもの

たてほり  
**堅堀**：丘城・山城などの斜面に設けられた空堀で、等高線に対して直角に掘られた堀

よこほり  
**横堀**：山城で曲輪の側面（斜面側）にも巡る堀のこと。発達したものでは城全体を囲み、城域を区画するものもある

こぐち  
**虎口**：城の出入口とこれを守るための施設のこと。城では出入口を攻められることが弱点となるので、虎口と称して厳重に守った。虎口は単に出入口の門のみをいうのではなく、出入り口の周囲の施設も含めて呼ぶことがある。城内へ直進で入るものは平入虎口という

よこや  
**横矢**：城内に侵入する敵に対して、側面から攻撃することを可能にした守るための施設。図のように、虎口側面の曲輪を張り出せば、虎口に向かう敵を側面から攻撃できる





VI郭から西の眺望 三好長慶が治めた範囲が一望の元に見渡せる

---

国史跡指定・三好長慶生誕 500 周年記念シンポジウム  
国史跡飯盛城跡 —歴史的価値と今後の活用を語る—  
資料集

開催日 令和 4 年 10 月 10 日  
会 場 大東市立総合文化センター サーティホール大ホール

令和 4 年 10 月 10 日第 1 刷発行  
令和 4 年 12 月 15 日第 2 版公開

編集・発行 大東市産業・文化部生涯学習課  
〒 574-0076 大東市曙町 4 番 6 号  
TEL 072-870-9105 FAX 072-870-9687

印刷・製本 株式会社ミラテック  
〒 534-0025 大阪市都島区片町 2 丁目 9 番 9 号  
TEL 06-6354-3081 FAX 06-6358-2985

---

|          |
|----------|
| 大東市印刷物番号 |
|----------|

|        |
|--------|
| 4 - 52 |
|--------|